

クロスロード

3

特集

青年海外協力隊事務局からの熱い思いを届けます！

これからの JICA ボランティア事業





表紙よせて

配属先のクリニックのCPたちと、医療の届きにくい村落や山岳地域を巡回して活動していました。この男性はクリニックでのリハビリテーションのために山奥から息子さんと来て滞在していた方で、リハビリの最中は真剣で寡黙でしたが、終わると一緒に雑談するのが日課でした。私の赴任当初より現地でのリハビリの認知度は着実に増してきており、一層の普及を願っています。下道真人さん(東ティモール/理学療法士/2016年度3次隊・鹿児島県出身) 写真提供=久野真一/JICA

2 子どもたちに伝えたいSDGs —世界の学校

3 ■Contents ■索引

4 JICA Volunteers' Reports

特集

6 青年海外協力隊事務局からの
熱い思いを届けます!

これからのJICAボランティア事業

14 派遣国の横顔 パプアニューギニア
～知っていますか? 派遣地域の歴史とこれから

20 専門家に聞きました!
失敗に学ぶ ～現地で役立つ人間関係のコツ

22 この職種の先輩隊員に注目! ～現場で見つけた仕事図鑑

24 ひきつけるアイデアを共有
みんなの教材づくり&アクティビティ

26 先輩隊員のシューカツ記

28 派遣から始まる未来
進学、非営利団体入職や起業の道を選んだ先輩隊員

30 待ってます、あなたを! ～各界からのエール

31 あの日、地球の、あの場所で。

32 JICA海外協力隊派遣現況

33 INFORMATION ～JICA青年海外協力隊事務局からのお知らせ～

34 隊員めし 現地で作った日本食、日本で作る現地めし

36 ウチのこだわり —OB・OGショップ

国別索引	掲載ページ
インドネシア	22
ガボン	31
コスタリカ	26
サモア	2
タンザニア	28
ドミニカ共和国	34
パヌアツ	5
パプアニューギニア	15、16、17、18
東ティモール	1
ペルー	22
マダガスカル	4
モンゴル	36
ネパール	21
ルワンダ	24

職種別索引	掲載ページ
コミュニティ開発	4、24
村落開発普及員	26、28
製材	16
養殖	31
観光業	5
環境教育	22
視覚教育	15
日本語教師	17
小学校教育	2、18
デザイン	36
作業療法士	21
理学療法士	1
高齢者介護	34

出身都道府県別索引	掲載ページ
北海道	28
栃木県	2
埼玉県	17
千葉県	34
東京都	22
長野県	15
静岡県	4、18
愛知県	21
京都府	31
大阪府	26
兵庫県	5、36
奈良県	16
長崎県	22
熊本県	24
鹿児島県	1

【凡例】
JICA海外協力隊の隊員(経験者を含む)については、次のように表記しています。

国際協子さん(ケニア/環境教育/2019年度1次隊)	氏名	派遣国	職種	隊次

「JICA海外協力隊」には「青年海外協力隊」「海外協力隊」「シニア海外協力隊」「日系社会青年海外協力隊」「日系社会海外協力隊」「日系社会シニア海外協力隊」があります。

『クロスロード』(通常号)は、JICA海外協力隊が活動・生活を円滑に行うための実践的な情報、および帰国後の進路開拓や社会還元をする際の情報を提供する雑誌で、年に10回発行しています。
編集・発行:
独立行政法人国際協力機構 青年海外協力隊事務局



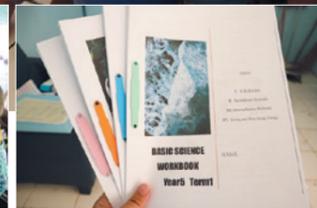
子どもたちに
伝えたいSDGs

世界の学校

ファウレラ小学校の子どもたちと先生、野沢さん(写真後列左)



サイエンスフェスティバルの様子



完成した5～8年生用の理科のワークブック。先生たちが用いているニュージーランドのカリキュラムに従い4期分の内容を学年ごとに1冊に収めた。野沢さんは5～6年生を担当

サモアの小学校で理数教育に携わり、子どもたちにわかりやすい理科教材を作りました

野沢有加さん(サモア/小学校教育/2017年度1次隊・栃木県出身)

南太平洋の島国サモアは人口20万ほどの小さな国です。ファウレラ村の小学校で4～8年生に理科と算数を教えました。二つの公用語の一つは英語で、日常的にはサモア語が使われます。

理科や算数の授業は、サモア語にない用語もあるため英語で行われています。しかし母国語でない授業は子どもたちが理解しにくく、また先生たちもニュージーランドで使用しているカリキュラムどおりに口頭で説明するだけとあって、授業内容と子どもの理解度が合っていないと感じました。理科の問題演習にあたるものがなかったため、サモアの小学校教育隊員たち4人で協力し、図やイラストを多用した5～8年生向け理科の学年別ワークブックを作成することになり、約1年かけて私の任期終盤に4冊が完成しました。

このほか任期2年目の11月に、隊員同士の発案で理科に興味関心を持ってもらうためのサイエンスフェスティバルを開催しました。体育館のような会場にブースを作り、ヨウ素液で葉っぱのデンプンの有無を調べる実験などをしてみせると大盛況。子どもたちも保護者も初めて見る実験に驚いていました。同時期に算数の基礎学力向上を目指した算数大会も行いました。

活動で心がけたのは、PCやプロジェクトターを駆使し、視覚的に理解を促す理科や算数の資料を用いて、できるだけわかりやすい授業にしたことです。また、算数の四則演算のプリントを作り、そのデータを残し、私の帰国後も活用できるようにしておきました。

プリントを子どもたちに宿題として渡すと、最初はまったく興味を持たなかった子が「今日は宿題をくれたの?」と聞いてくるまでになりました。「勉強はわかると楽しい」ということを理解してくれた子どもたちの成長に感激しました。

from Japan



バヌアツと日本の子どもたちをつなぎたい 外務省支援でオンライン交流の基盤作り

バヌアツ・ナバンガ ピキニニ友好協会

中田里穂さん (SV/バヌアツ/観光一般/2005年度0次隊、SV/ミクロネシア/観光業/2012年度4次隊・兵庫県出身)

私たちがバヌアツ・ナバンガピキニニ友好協会はバヌアツの発展に寄ると共に、バヌアツとつながること日本の子どもたちがさまざまな価値観や可能性を知るきっかけづくりをしています。

バヌアツは経済的には苦しいものの、人々が豊かな自然と伝統を大切に生きている「世界一幸せな国」※1です。日本の子どもたちにバヌアツの魅力に触れて感性を伸ばしてほしいと、これまでに前出授業、写真展、児童画展などを開催してきました。特に写真展は日本国内各地で約30回開催しており、日本に数名しかいないバヌアツ人留学生が暮らす地方都市でも開催し、留学生を会場に招いて講演してもらったり、留学生と地域の人々の交流促進も兼ねてきました。

会の設立は2016年、サイクロン・パムで被災したバヌアツの子どもたちを支援するために、現地に伝わる民話を翻訳した『ナバンガピキニニBook』を出版し、販売で得られた収益と寄付金をバヌアツに届けたことが始まりです。私がシニア海外ボランティアとして活動していた時に日本から訪ねてくれた友人たちやバヌアツOVが中心になって活動を続けてきました。

現在、会員数は約170名に増え、中にはOVの現職教員も多数いるの

善。おまけに廃液は農作物の肥料になり、生活改善という私の要請にも結びつくと思っていました。

思い立ったら即行動で、2021年末頃から家畜の飼育状況やバイオガスの認知度について各戸調査を始めました。農家の誰もが興味津々であったため、私のほうからマダガスカルみらいの方にバイオガスの普及活動がしたいと申し出ると、私の調査内容や熱意を買っていただけました。コロナ禍で装置の設置は中断していましたが、既に稼働している装置の視察をさせていただき、マダガスカルみらいと協働している日本の環境系NPOエコロジョイオンラインとも連携しつつ、私の任地の調査、DRAE職員への説明会などの実現に向けて目まぐるしい日々を過ごしました。マダガスカルみらいとエコロジョイオンラインによる寄付で1基分の資金も用意できました。

22年8月、ついに第1号基が完成。設置先は農業普及員を務めるモニカさんという女性の家でしたが、「炭を買わなくなった」「炊事が便利で楽になった」と喜んでいて、会うたびに感謝の言葉をいただきます。台所が整頓された影響なのか、家全体も驚くほどきれいになった印象です。守備範囲の広いコミュニティ開発隊員として五感をフル稼働させて行動してき

1 首都ポートビラのSDA小学校の3年生33名。東京都府中第一小学校3年生161名とオンライン交流授業を行った。右端は通訳をしてくれたエリザベスさん

2 SDA小学校の子どもたちと一緒に歌を歌う府中第一小学校の3年生

バヌアツ・ナバンガ ピキニニ友好協会のHP
<https://vanuatu-npfa.com/>



※1 2006年にイギリスのシンクタンクによって世界一幸せな国に選ばれ、旅行誌『ロンリープラネット』で紹介された。

※2 日本の国際協力NGOの人材育成を通じた組織強化を目的に、国内外で研修を受けるための経費を支給する。所属団体が抱える課題に基づき、主体的に研修計画を策定することができる。



ですが、日常の業務に追われて、バヌアツでの経験を日本の教育現場に生かす機会をなかなか持てずにいる状況があります。そこで21年に双方の国の子どもたちをインターネットでつなげる交流授業を始めたのですが、それをもっと積極的に行っていくため、22年秋に外務省の「NGOスタディ・プログラム」※2を利用して約1カ月間バヌアツに滞在しました。オンライン交流授業の基盤作りと、今後、日本の子どもたちをバヌアツに連れていく際の受け入れ態勢を確認することが目的でした。現地の教育省をはじめ、学校現場の先生方や交流授業の通訳者、IT技術者など支援者たちとの打ち合わせを行ったり、実際に日本の小学校と結ぶ場合の具体的な課題を探りました。

この期間中には、バヌアツOVが関わっている日本の小学校2校それぞれと、現地の小学校などを結んだ2回のオンライン授業も実施。IT環境に問題はないことがわかりました。授業自体も、生徒たちが互いの生活について尋ねたり一緒に歌ったりと充実した内容で、体験した両国の学校から今後も継続してほしいとの声をいただきました。

今回活躍してくれたのが、日本で学んでバヌアツへ戻った元留学生たちです。IT専門家として手伝って

れた人をはじめ、それぞれが豊富な人脈を生かして交流授業をサポートしてくれました。

オンライン交流授業は今後、バヌアツOV、元留学生がコアメンバーとなって発展させていきます。もっと実施を増やし、日本の教育現場に刺激を与えて、子どもたちの教育に貢献していきたいと思えます。バヌアツの子どもたちとの交流授業を行いたいOVの方、ぜひ当会まで声をかけてください。

from Madagascar



ご縁と五感と行動力で、 バイオガス普及活動に邁進する

中田里穂さん (マダガスカル/コミュニティ開発/2021年度1次隊・静岡県出身)

世界に目を向けてもっと成長したいの思いから、10年余り勤めていた市役所を退職して協力隊に参加、首都アンタナナリボの南にあるアンチラベという地域のDRAE（農業畜産省の県支局）で活動しています。主な活動は地域住民の生活改善などですが、目下、特に注力しているのが牛ふんバイオガスの普及です。

インフラが整っていない農村地帯では炊事などで大量の薪や炭を必要とし、森林伐採が深刻になっています。それを改善する一助となるのが、このバイオガスです。大抵の農家は住居の1階部分で牛などの家畜を飼っていて、バイオガス装置を使えば、ふんを発酵させてメタンガスが生成でき、それを炊事や照明に用いることで薪や炭の使用を減らせます。

実は赴任直後に、NGOマダガスカルみらいの方から現地でのバイオガスの普及などについてお話を伺う機会がありました。その時は要請内容と直接関係があると思えず、「そういうものがあるんだ」程度の認識でした。しかし、実際に農村に入り、人々が薪や炭の購入に少なくない費用を払っている様子や、家の周りにそのまま放置されている牛ふんを目にして、バイオガスが役に立つとひらめきました。森林の保護という面だけでなく、光熱費が抑えられ、衛生状態も改

進する。おまけに廃液は農作物の肥料になり、生活改善という私の要請にも結びつくと思っていました。

思い立ったら即行動で、2021年末頃から家畜の飼育状況やバイオガスの認知度について各戸調査を始めました。農家の誰もが興味津々であったため、私のほうからマダガスカルみらいの方にバイオガスの普及活動がしたいと申し出ると、私の調査内容や熱意を買っていただけました。コロナ禍で装置の設置は中断していましたが、既に稼働している装置の視察をさせていただき、マダガスカルみらいと協働している日本の環境系NPOエコロジョイオンラインとも連携しつつ、私の任地の調査、DRAE職員への説明会などの実現に向けて目まぐるしい日々を過ごしました。マダガスカルみらいとエコロジョイオンラインによる寄付で1基分の資金も用意できました。

22年8月、ついに第1号基が完成。設置先は農業普及員を務めるモニカさんという女性の家でしたが、「炭を買わなくなった」「炊事が便利で楽になった」と喜んでいて、会うたびに感謝の言葉をいただきます。台所が整頓された影響なのか、家全体も驚くほどきれいになった印象です。守備範囲の広いコミュニティ開発隊員として五感をフル稼働させて行動してき

たことが実を結び、本当によかったと思います。

目下、新たに3基の装置を建設予定で、今後に向けて現地語のマニュアル作成や研修なども計画しています。任期の終盤を意識する時期に入ってきましたが、残りの期間で持続可能なプロジェクトとするのが目標です。



1 牛ふんと水を混ぜたものを地下のドームで発酵させてガスを生成する。臭いは気にならないという

2 1号基を設置したモニカさんの家の庭。深さ2mほどの穴を掘り、レンガを積み上げてドームを作る

3 バイオガスを利用したガス灯で皆の表情も明るくなった



青年海外協力隊事務局局長
橋秀治氏インタビュー

平和で安定した豊かな社会を 一緒に築いていくために

青年海外協力隊事務局からの熱い思いを届けます！ これからのJICA ボランティア事業



2022年12月1日付でJICA海外協力隊出身者の橋 秀治氏が青年海外協力隊事務局局長に就任されました。そこで本特集では、橋氏と青年海外協力隊事務局でJICAボランティア事業を支える職員の皆さんへインタビューを行い、国際協力やJICAボランティア事業への思い、現役隊員の皆さんへのメッセージを頂きました。



橋 秀治

Hideharu Tachibana

- 1997年 青年海外協力隊に参加 (インドネシア/市場調査/1996年度3次隊)
- 1999年 国際協力事業団 (現JICA) 入構
- 2002年 インドネシア事務所
- 2010年 米国事務所次長
- 2013年 人間開発部基礎教育第二課長
- 2016年 企画部総合企画課長 (2018年よりJICA開発大学院連携準備室副室長兼務)
- 2019年 総務部審議役
- 2020年 総務部審議役/企画部イノベーション・SDGs推進室長
- 2021年 総務部審議役/次長
- 2022年12月 青年海外協力隊事務局局長に就任

自身の協力隊活動について
インドネシア中部に位置するスラウェシ島南スラウェシ州バル島の、五つの村の総合開発に取り組みました。農業、家畜、村落開発普及員(現・コミュニティ開発)など、いろいろな職種が常時7~8名で現地に入る「チーム派遣」で、私は市場調査を担当しました。主に行ったのは三つです。一つ目は五つの村で作られる農畜産物の流通・販売方法や、価格設定がどこで行われているかといった調査です。二つ目はまだ市場がない村で、物理的に市場を造る、いわゆる肉休労働。三つ目が、村で栽培している農産物の加工販売でした。私自身はカシューナッツを選び、村の婦人グループと一緒に商品開発を行いました。村落開発普及員としての役割を担いましたが、一緒に取り組みました。

協力隊参加のきっかけ
学生時代に国際経済を専攻していたので、国際協力・開発協力には関心がありました。背中を押されたのは阪神・淡路大震災です。社会人として関西で働いていた時、自分が被災しただけでなく、同じ年の友人を亡くし、「この先の人生、どうせならやりたいことをやろう」と決意しました。

協力隊で学んだこと
教室で学んだり本で読んでいたことを、自分の目で見て体験できたこと、ふらっと訪れただけでは知り得なかったであろう途上国の貧困の現実を知ることができたことは大きかったと思います。当時チームに配属された協力隊員は活動先の村に住まわせてもらうのが一般的で、私も村人の家にホームステイさせてもらって一緒に生活しました。それでも、我々外部者が接することができず、我々外部者が接することができない村人は村の中でも比較的豊かな人たちでした。しかし、長く生活していくうちに、なかなか豊かになれない人、貧困で苦しんでいる人たちと話をする機会も増えていきました。

また、日本の製造業がどんどん国外に拠点を移している時期でもあり、取引先企業の多くがタイやインドネシアをはじめとしたアジアに進出し始めていた。自分の目で海外の現場も見てみたいと思ったことも、背景の一つとしてあったと思います。

日本とは比べものにならないほど虫が多かったり、ネズミが出たりといったことはありましたが、暮らし自体が新鮮で、楽しみながら生活していました。

世界情勢が大きく変化する中、JICAボランティア事業はどうあるべきか。ご自身の協力隊経験も交えながら、事業への思いを伺いました。

平和で安定した豊かな社会を一緒に築いていくために

時々週末に隊員同士で町に出て夕食を取ったり、活動について議論したりと、そうしたことが良い気分転換になりました。非常に恵まれた環境だったと思います。

JICA入団の経緯

帰国してすぐ、国際協力事業団（現JICA）の短期専門家として約3カ月間インドネシアへ赴任しました。当時のインドネシアは、スハルト政権が倒れて初めて民主的な選挙をやるうとしていました。選挙管理委員会の下、地方を回って投票用紙が届けられるかをチェックしたり、選挙のやり方を指導したりしました。その後、JICAの社会人採用試験を受けました。

入団を決めた理由は、隊員として村で生活する中で格差や貧困の問題を自分事として経験し、この問題を解決していきたいという強い思いが生まれたからです。特に「子どもたちには公平なチャンスがある社会にしていきたい、そのために開発協力を生涯の仕事にしていきたい」と思いました。

インドネシア事務所、アメリカ事務所、企画部、人間開発部などを経験しました。人間開発部ではアフリカの基礎教育を担当し、この分野ではまだ課題が大きいアフリカの基礎教育を少しでも良くしたいという思いで、技術協力中心に取り組みました。

です。ただ学校に行かせることだけでなく、学んで成長につながるよう、算数のドリルを親子でやって成長を促す。当時デジタル教材が出てきた頃で、理数科教育で従来型と並行して新しい取り組みができないか——など。

こうしたことを現場に落とし込んでいくと、協力隊の方々の活動にも関わってきます。決して我々が東京のオフィスで考えて、体のいい文章を書いて終わりはありません。実際の現場がどう変わるか、実際に学校に通った子どもたちがどう成長したか。協力隊の活動を通じて、現場が本当に変わるか、少しでも現場で役に立つかを考えること。それが我々の仕事にとって一番大切なことだと思っています。

協力隊事業への思いと、これから取り組みたいこと

まずお伝えしたいのは、協力隊事業は、戦後日本という国が各国の方々とどのような関係を持っていたいかに具体的に表している事業ということ。「現地の人たちと共に汗を流し、考えて一緒にやって課題を解決する。そうすることで少しでも平和で安定した豊かな社会を一緒に築いていきたい」、これが戦後、日本の諸外国に対する姿勢であり、それを最も具体的に表している活動の一つが協力隊であると考えています。協力隊事業は、日本が誇るべき取り組みです。ロシアによるウクライナへの

侵攻、新型コロナウイルスの感染拡大、気候変動など、複合的な危機に直面する中で、日本は世界にどのように貢献していくのか。今、協力隊が求められていますし、我々はより一層、力を入れてこの事業を行っていく必要があります。日本は世界とつながっていないと生きてはいけません。だからこそ、人と人とのつながりを回復させ、国と国との信頼関係につなげていきたいのです。そうした中で特に力を入れたいことが二つあります。

一つ目は、隊員の派遣人数を早期に回復させることです。コロナ禍の一時帰国から徐々に再派遣が始まっているとはいえ、以前は常時2000人の隊員が派遣されていた状況からすると、まだ800人弱です。派遣水準を戻すことが最も優先すべき課題です。

派遣中の隊員の方には、これまで以上



JICA全体で取り組む20の「JICAグローバル・アジェンダ」に即した活動を行う隊員もいる。上：ルワンダで「水の防衛隊」として活動する隊員、右：インドネシアで母子手帳の活用などの活動を行う隊員（2点とも写真提供=JICA/今村健志朗）



に情報提供やサポートができるようになってきています。その一つが「課題別支援Linked In」のネットワークです。このネットワークに参加してもらえば、同じ分野で活動する多くの隊員や隊員OVとつながることが出来ます。さまざまなネットワークを維持・強化しながら、隊員活動の質の向上を目指し、安心して協力隊に参加していただける環境や仕組みをしっかりとつくりついで、途上国から協力隊派遣の要請は続いていますので、それに応えたいという思いや責任があります。

二つ目は、帰国隊員の方々への支援の強化です。さまざまな経験をされた隊員の皆さんは、日本の宝です。地方創生や多文化共生社会を実現する上で活躍していただける方が非常に多いと思います。昨年からスタートした「グローバル・プログラム」や、今年から行

けての実践者でもあります。派遣された地域・配属先で課題を見つけ、多くの方とつながり、議論しながら少しでも良い解決策を実現していく、こうした隊員の方々が行う小さな積み重ねがなければSDGs達成は難しいでしょう。

協力隊の活動はうまくいくことばかりではありません。私自身、大成功で活動を終えたわけではありません。先ほど申し上げたカシューナッツの加工では四苦八苦しました。ただ、その過程で学ぶことが多かったと思います。

加工すれば利益が上がるとアイデアを出しても、村の人たちの中には収入は少なくとも、加工せず今ままでおりの安定した収入のほうがよいと考えている方もいました。活動プロセスの中で村の人たちとの接し方を学んだりといった経験を積むことができ、次の活動へとつながっていきました。

皆さんには派遣国への貢献だけでなく、自分自身のチャレンジや成長の実現の場として、さまざまな活動をしていただきたいと思えますし、できればそれを楽しんでもらえたらと思います。うまくいかなくて悩んだ時には、悩みを一人で抱え込まないで、同じ任地の隊員やボランティア担当のJICA事務所員等と意見交換するなど、いろいろな人と話をしながら解決策を見いだしてください。失敗も貴重な経験と捉え、学んでそれを次の活動や帰国後の次のステップに生かしてもらえたら、こんなに嬉しいことはありません。



橋事務局長から現役隊員の皆さんへ、お薦めの本



1. 中村哲
『希望の一滴 中村哲、アフガン最期の言葉』
アフガニスタンの方々のために人生をかけて取り組んだ中村先生の生きざまと、協力隊活動にも通じるいろんな学びや視点がふんだんに盛り込まれています。



2. 三戸岡道夫
『二宮金次郎の一生』
協力隊の先輩から薦められた本です。二宮金次郎は日本の貧しい村の村落開発に取り組んでいて、今でいう参加型の開発協力を実践していた人です。



3. 高橋和志、山形辰史
『国際協力ってなんだろう —現場に生きる開発経済学—』
活動後に国際協力分野に進みたい方、勉強したい方への入門書です。著者の一人、高橋和志さんは協力隊OBです。

現役隊員の皆さんへ

さまざまな要因で世界情勢が厳しい中、協力隊に参加してくれていることに、まずもって感謝を申し上げたいと思います。安全第一なので健康と治安に留意しながら精いっぱい活動していただいて、必ず無事に帰国していただくことを心から願っています。

2030年を達成期限とするSDGsは折り返し地点を迎えており、その取り組みを加速していく必要があります。協力隊員の皆さんはSDGs達成に向



国内業務・課題

P 大学を休学してデンマークのNGOに参加し、モザンビークで公衆衛生活動を行いました。内戦後、地雷がまだ残る同国は、復興への希望に満ちていました。その頃、マラリアなどで何度か死を意識したこともあり、「どうせいつかは死ぬのだから、生きている間は人のためになる仕事をしたい」と、JICAに入構、最初の配属先が青年海外協力隊事務局の海外グループでした。面接に立ち会い、訓練所で任国事情を説明し、巡回指導で現地を回り、帰国報告会で隊員の方々と接すると、約2年間の成長に驚きました。帰国した隊員から幸せな報告を受けるだけでなく、派遣国で不幸な出来事が起こることもあり、その都度、隊員の方々の人生を預かる責任の重さを感じました。今年2月から22年ぶりに事務局配属となりました。

M ウガンダ事務所長時代の2021年12月に、全世界で初めて、ウガンダの国会でJICAの協力を讃える決議が採択されました。地域の人々と苦楽を共にしながら、寄

次長
内山貴之さん
Takayuki Uchiyama



り添い活動する協力隊事業も評価されてのことです。2年間でやり残したこと、できなかったことがあったとしても、その国であなたの影響を受けている人がいるかもしれません。自分なりに頑張ってください。**B** 諷刺劇『進撃の巨人』。正義とは、敵・味方とは、人間とは、戦いとは、歴史とは——と、考えさせられた作品です。アニメもお勧めです。**O** チェロ演奏です。



各課を支える人々

※アイコンの説明

- P** (Profile) …… プロフィール。国際協力機構 (JICA) 入構 (国際協力事業団入団を含む) のきっかけや、現在の業務内容、やりがいなど。
- M** (Message) …… 隊員へのアドバイスやメッセージ。海外在住経験のある方にはその国のことも含めて。
- B** (Book) …… 隊員の方に薦めたい本や漫画。
- O** (Off) …… プライベート。趣味や余暇の過ごし方。

③人材育成課

課長
館山丈太郎さん
Jotaro Tateyama



P 米国の大学で国際関係学を専攻しましたが、日本のIT企業に就職し、3年間勤務しました。先輩が協力隊に応募したことで、やはり自分も国際協力の道にと思い入構しました。当課では、選考後に行うグローバル・プログラムや派遣前訓練の調整、協力隊を終えてからの進路開拓や社会還元への支援関連を行っています。参加される方々や隊員の方々と接する時、熱量の高さに圧倒されます。しっかり受け止め、応えていきたいと思っています。

M それまでに国際協力に関わることがなかった方でも、途上国に行って現地の人々のためになることができる—それが協力隊のすごいところです。自分のやりたいことよりも、小さなことでもいいので相手の困り事に取り組むといいと思います。それにより活動が広がったり、最終的に想像以上のことにつながるかもしれません。

B パウロ・コエーリョ『アルケミスト』。目の前の物事に誠実に向き合うことで次の展開へと導かれる物語です。

O 焼き菓子作り。レシピに忠実に作れば失敗がない。



又吉木野さん
Kino Matayoshi

P 中学・高校時代に教育格差や途上国問題に関心をもち、高校3年時にカンボジアのスタディツアーに参加して国際協力を志しました。新卒でJICAへ入構し、現在は進路相談カウンセラーの方々と調整、無料職業紹介の運営、支援して下さっている企業や団体を紹介する「サポーター宣言」や、OV向けの「クロスロード (別冊)」などに関わっています。

M 安全面では、危険度の感覚が地元の人と外国人では違うことが多いので両方の目線を持ち、JICAが発信する情報も参考にしながら、活動や生活を楽しくしてください。時には悩み過ぎず行動することも大切だと思います。

B ハンス・ロスリング他『FACTFULNESS』。途上国で先入観や思い込みにとらわれず現状を理解するために。

O コロナ禍をきっかけに日本を知ろうと、なるべく月に1度は国内旅行に出かけています。グローバル・プログラムの受け入れ自治体にも行ってみたいと思っています。



②課題業務・選考課

課長
工藤美佳子さん
Mikako Kudo



P 学生時代、アフリカの飢餓問題に対して「日本では食べるものに困らないのに、なぜ世界には飢える人がいるのか」と疑問を抱き、日本のODA批判に対して「内側から変えていきたい」との思いで入構しました。当課では選考、課題別ナレッジシェアリングの調整、課題別支援LinkedInの運営、技術顧問・技術専門委員に係る業務などを行っています。選考時に応募者の熱い思いを直接聞けるのは純粋に嬉しく、やりがいを感じます。

M 在外事務所の所員は情報やネットワークを持っているので、自分の職種に関連する所員がいたら気軽に相談するといいと思います。課題別ナレッジシェアリングや課題別支援LinkedInグループも活用し、同じ職種の人とつながってください。

B 深谷かほる『夜廻り猫』。8コマ漫画で、がんばっている人や弱者へのまなざしが優しい。ネットでもどうぞ。

O コロナ禍前はバレエ、以後はバレエ鑑賞。平日の癒しは『Eテレ2355』(23:55から5分間のテレビ番組)です。



倉持百花さん
Momoka Kuramochi

P 小学生の頃から国際協力関連の仕事や世界の戦争・紛争に関心がありました。学生時代はタイにある水産系の国際機関でインターンを経験し、昨年、新卒でJICAに入構しました。現在は選考や課題別業務で、保健医療系、栄養士、幼児教育、環境教育の職種を担当しています。「途上国の課題解決に挑みたい」という方々の夢の実現にも寄与するJICAボランティア事業に、日本の国際協力の明るい未来を感じています。

M 安全に気をつけて思い切り活動を楽しんでいただき、帰国後はぜひJICAをサポートしていただけたら嬉しいと思います。タイの隊員の方は特に Deng 熱、大気汚染、雨期の冠水に気をつけてください。

B 山口絵理子『裸でも生きる』シリーズ。途上国での葛藤や壁にぶつかった時の考え方などが参考になります。

O ラーメン屋巡り、一人カラオケ、岩盤浴です。



①参加促進課

課長
永瀬朝則さん
Tomonori Nagase



P IT企業に就職後、漠然と海外経験を積みたいと協力隊へ(ジャマイカ/SE/1994年度2次隊)。活動中に国際協力の道を志し、英国大学院留学後、入構。当課は協力隊の募集・広報全般、現職参加の促進や所属先との調整、協力隊連携派遣や「世界の笑顔のために」プログラムの実施などを行っています。協力隊は、世界にも日本にも参加者本人にとっても有益な事業で、「自分もいつか参加したい」と思われるような広報活動を心がけています。

M ルワンダ事務所次長時代に隊員の方々に伝えていたのは、「協力隊参加を決めた初心を忘れないこと」と「帰国後の自分を想像すること」。日本と異なる環境下で自分を見失いそうな時には、原点に立ち返り、なぜ参加しながら頑張っていたかと思い出す。

B デール・カーネギー『人を動かす』。隊員活動でも参考になる対人関係構築の極意が説かれています。

O もっぱら家族サービスで、自分の時間はありません。



三浦香里さん
Kaori Miura

P 美術館や博物館、図書館などで学芸員として働き、大学で広報もしていました。協力隊に参加した親戚が、マレーシアの障害のある方々にパン作りを教えていて、どんな経験も生かせる協力隊事業に魅力を感じました。現在は協力隊事務局のSNS (Facebook・Twitter) アカウントでの発信と、事務局が保有する隊員活動に関する写真の整理を担当しています。

M 業務の中で協力隊の方々の活動を拝見しますが、「大切なのは知識・技術だけでなく気持ち」という隊員の方の言葉に、「気持ちが強ければ、何でも乗り越えられる」と感銘を受けました。隊員の方々の活動も発信していますので、迷った時など参考にしてください。

B グレース・ボニー『自分で始めた女たち』。世界の女性が自分の仕事と夢について語っていて、夢を見る勇氣と、それを表現する強さをくれる本です。

O 合唱と、イタリア語の勉強、スポーツ観戦です。



青年海外協力隊事務局の仕事

青年海外協力隊事務局の業務は「国内業務・課題」、「海外業務」、「総務・企画」があり、七つの課に分かれて約120人が従事している。

「国内業務・課題」は①「参加促進課」(協力隊の広報全般、募集説明会の実施、現職参加の推進、協力隊連携派遣や「世界の笑顔のために」プログラムの実施、「クロスロード」の制作・発行など)、②「課題業務・選考課」(選考や技術顧問・技術専門委員に係る業務、課題別派遣前訓練の実施、課題別支援リンクトインの運営など)、③「人材育成

課」(グローバル・プログラムや派遣前訓練の全体調整、帰国後の進路開拓支援「帰国時プログラムの開催、進路相談カウンセラーの配置、帰国隊員への教育訓練手当など」や社会還元促進)があり、主に隊員の派遣前後を支える業務を担う。

「海外業務」は地域別に④「海外業務第一課」(東南アジア、大洋州、中南米地域)と⑤「海外業務第二課」(中央アジア、南アジア、中東、欧州、アフリカ地域)があり、70カ国を超える隊員派遣国に対応する国担当を配置。JICA在

外拠点とともに隊員派遣に係る事業計画を策定し、春と秋の募集期に向け、具体的な案件発掘・形成を支援する。派遣中隊員の活動、安全管理、健康管理なども支援。また、派遣班を中心に隊員の渡航に係る各種手続き、手当の支給他にも対応する。

「総務・企画」は⑥「計画課」(総務、予算管理、制度、省庁・外部関連団体の窓口、行事の運営、隊員ハンドブック制作など部内横断的業務)、⑦「企画業務課」(ボランティア事業の計画立案・評価、JOCV枠UNV制度をはじめとす

る国際連携、企画調査員「ボランティア事業」の制度運営、「スポーツと開発」に係るJICA全体の事務局や戦略形成など)があり、協力隊事業の土台を作り、新しいことに取り組みながら事業の質を改善していく業務を担う。

こうしたJICAボランティア事業を支える青年海外協力隊事務局には、どんな思いを持った方たちが勤務しているのか。管理職や職員の方々に、JICA入構のきっかけや現在の業務内容、隊員へのメッセージ、お薦めした本や漫画などを伺った。



総務・企画

P 学生時代のゼミ合宿で、タイにあったカンボジア難民キャンプやマレーシアの熱帯林が伐採されている村へ行き、現状を目の当たりにしたことが入構のきっかけです。協力隊事業は事業の流れに沿ってそれぞれの課がありますが、我々は全体のとりまとめとして、事業全体の計画・評価、制度づくり、予算管理、事業支援要員、新規事業を含む事業の質の改善の取り組みや、対外的な行事などの対応を行っています。現場に出る協力隊員の方々に対し、一歩引いた立場で事業の土台をつくる大切さや意義を感じています。帰国報告会などで隊員の方々の話を聞くことが楽しみです。

M どの国でも自分の意思を伝え、それに対する相手の意見も聞いて、対話することが大切です。母国語を大切にすることが多いので、拙くてもその言葉を使って懐に飛び込めば受け入れてくれる方が多くいるでしょう。心身共に健康であるこ

次長
内田 淳さん
Atsushi Uchida



と、安全であることが一番ですが、視野を広く持ち、楽しみながら挑戦してってください。

B 河合隼雄『こころの処方箋』。平易な文章で人間心理の「常識」が示され、人間関係の考え方を広げるヒントになります。

O 海釣り。なるべく自然の中に身を置きたいと思っています。



海外業務

P 途上国の環境問題解決について研究したいと、民間企業を辞めて大学院に進み、JICAに入構しました。モンゴル事務所や帯広センターなど、最近の7年間は寒い地域にいたので、東京が暖かく感じます。現在は海外業務担当次長として、全世界への隊員派遣、国別事業計画策定等を担当しています。特に、派遣人数をコロナ禍前の2000人に戻すべく、海外グループとして一丸となって業務に取り組んでいます。

M まずは安全が第一です。派遣されている国の治安状況をよく理解した上で現場に入っていき、かけがえのない2年間を経験していただきたいと思います。モンゴル隊員の方々に向けは、プロのスリと、お酒を飲んで荒れている人にはくれぐれもご注意を。

B 馳星周『神(カミイ)の涙』、『少年と犬』。前者はアイヌ民族、後者は東日本

次長
沢田博美さん
Hiromi Sawada



大震災を題材にした小説です。協力隊として途上国のこと、派遣国のことに関心を持っていただいたと思いますが、日本や地方が抱える課題にも目を向けるきっかけに。

O 帯広センター時代にペーパードライバーから脱却し、雄大な自然を楽しみながらドライブすることに目覚めました。



⑦ 企画業務課

課長
近藤信孝さん
Nobutaka Kondo



P 総務省勤務時代に留学したメキシコで途上国の発展の勢いに魅了され、入構しました。当課では、協力隊事業の計画立案や評価、国際連携、企画調査員(ボランティア事業)の方々のための制度運営、「スポーツと開発」の課題に対する取り組みなどを行っています。エルサルバドル事務所やパラグアイ事務所時代から実感していますが、エネルギーがあって魅力的な隊員の方々の活動のお手伝いができることを嬉しく思っています。

M 日本社会は外国人材がいなければ成り立たなくなっています。隊員の皆様にはぜひ、帰国後日本の方々と外国人材をつなげていただきたいと思います。パラグアイ隊員の方々に向けは、牛肉がおいしいので食べ過ぎておなかを壊さないようにご注意ください。

B 佐藤優『国家の畏』、ユン・チアン『ワイルド・スワン』。国を背負って活動する皆さんへ、国家を理解する参考に。

O 最近は筋トレと読書ですが、料理も好きで、パラグアイ事務所時代は隊員の方々を呼んで振る舞っていました。



増田萌子さん
Moeko Masuda

P 母や大学の先輩ら、周囲の隊員経験者の影響から新卒で協力隊に参加しました(セネガル/体育/2016年度2次隊)。帰国後も国際協力に関わりたかった時、フランス語を高めたいとフランスへ語学留学し、その後、入構しました。現在「スポーツと開発」を担当し、JICAと協定のあるスポーツ団体等との連携に関する業務などに携わっています。

M 活動が進まなかったり、時間があり余ったりした時、他の隊員と比べて焦らないことです。落ち着いて、活動のこと、将来を含めた自分のことなどについても、じっくり考えられる良い機会と捉えるといいかもかもしれません。

B 高橋美佐『フランス語で手帳をつけてみる』。先輩隊員が置いていった本です。任地でのやりとりは現地語が多く、フランス語を忘れそうだったので、せめて日記を書こうと思い、参考にしていました。

O スポーツが好きなので、ランニングやジム通いです。



⑥ 計画課

課長
加藤憲一さん
Kenichi Kato



P 隊員経験(ドミニカ共和国/農業土木/1990年度2次隊)から国際協力の仕事に関心をもち、入構しました。当課に異動になる前は二本松訓練所に勤務していたので、現役隊員の方で一緒にいた方もいるかもしれません。当課は協力隊事務局の総務、予算管理など事業に共通する仕事を担当しています。例えば皆様にお配りする「隊員ハンドブック」の取りまとめも行っています。

M 途上国で価値観が一変する方も少なくないと思います。自分とは違う価値観があることを認識したり、自分の常識とは違うことが起きることを理解する。受け入れなくてもいいけれど、違うということを認識して、攻撃しないこと。そこからその人なりの活動が始まるように思います。

B 柳原和子『「在外」日本人』。1990年代の古い本ですが、当時海外で仕事をしている方や暮らしている方のインタビュー集です。同じ日本人なのに価値観が違う人たちがこれほど多くいるのかと驚きました。

O ランニングです。



吉村茂子さん
Shigeko Yoshimura



P 「世界青年の船」での途上国の青年たちとの交流がきっかけとなり、協力隊に参加しました(ベリーズ/PCインストラクター/2009年度2次隊)。帰国後もIT関連の仕事続け、計画課は足かけ9年目を迎えます。協力隊事業で使用システムの管理や契約関連の業務を担当しています。

M 隊員時代は目の前のことに精一杯だと思いますが、貴重な2年間ということ意識しながら現地の人々に一生懸命接することで、帰国後の生き方も含めて、見えてくるものがあるはず。私も隊員活動をきっかけに、デジタル・デバイド(情報格差)の解消が、途上国の人々にどのような影響をもたらすかを大学院で研究中です。

B マシュー・サイド『多様性の科学』。様々な意見の集約で良い答えが見つかるという主張は活動のヒントに。

O 箱などに布や紙を貼るフランスの伝統工芸・カルトナージュを習っていて、名刺入れなども手作りしています。



⑤ 海外業務第二課

課長
杉本 巨さん
Ôki Sugimoto



P 協力隊参加(ハンガリー/日本語教師/1994年度1次隊)後、郵政省勤務を経て、入構しました。当課では、中央アジア、南アジア、中東、欧州、アフリカ地域約40カ国の国担当として、在外事務所との連絡や調整、隊員の方々の書類作成などを行います。やりがいは、隊員の方々に「派遣国への一生継続く愛を感じられる経験」をしていただくことです。

M 言語はコップに水を入れるようなもので、あふれるまで見えませんが、あふれた時にふっとできるようになります。現地の方々と楽しく会話して、いい関係を築き、語学力も磨いてください。ただし言語ができるようになると、緊張感が薄れます。相手に犯罪の隙を与えず、安全と健康を確保して、成果を求め過ぎず、楽しんでください。

B ヴィクトール・E・フランクル『夜と霧』。アウシュビッツの話です。派遣国に関する書籍をお薦めします。

O ハンガリー、ウズベキスタン、チュニジア、マダガスカルと民族楽器を習いました。音楽は人との距離を縮めてくれます。



後藤大祐さん
Daisuke Goto



P 学生時代に陸上競技に打ち込み、協力隊へ(モルディブ/陸上競技/2008年度2次隊)。帰国後、NPO職員としてパレスチナに2カ月間滞在し、協力隊事業の本質に気づき、事業を未来に残したいと駒ヶ根訓練所(訓練スタッフ)やインド(VC)での勤務後、入構。現在はウズベキスタン、タジキスタン、カメルーン、セネガル、マダガスカル、ジブチを担当しています。

M 長いトンネルの中腹にいる人がほとんどだと思います。何も残せなかったとしても悔やむ必要はありません。自分なりに今、何が必要なのかを考えて、一生懸命その国の皆さんのために活動してください。振り返った時にかけがえのない異国の友人があなたの隣にいないはず。皆さんとその国の友人が、両国の大きな懸け橋です。

B R・A・ハイフェッツほか『最前線のリーダーシップ』。周囲を巻き込む際の事例が面白くなります。

O 長年の習慣のウエイトトレーニングやジョギングです。



④ 海外業務第一課

課長
成田映太さん
Eita Narita



P アジアを旅し、人々の生きる力に触れ、開発途上国に関わる仕事が入構。最初の配属先が青年海外協力隊事務局。エチオピア、ルワンダ、トルコに駐在経験あり。当課では東南アジア・大洋州、中南米地域の約40カ国を担当。コロナ禍で帰国された隊員や2019年度3次隊の皆様、特別登録へ移行された方々とお話する機会に恵まれ、一人ひとりの人生における思いを改めて知ることができました。派遣国からは早く隊員を戻して欲しいとの声をたくさんいただき、在外拠点の主導で隊員派遣が進んでいます。コロナ禍でも現場に入ることを志し、隊員が任地で遅く、しなやかに活躍している様から、事業の意義深さを実感しています。

M 隊員活動・生活では効率性から少し離れて、時間を掛けて悩んだり、止まったりすることも醍醐味です。安全対策は国ごとのポイントをしっかりと見極めてください。

B 三浦綾子『海嶺』。20代で出会い、ダイナミックでこんな生き方もあるかと感じ入った本。**O** サッカー(JFA公認C級コーチライセンス取得)。



水野秀哉さん
Shuya Mizuno



P 日本と世界をつなげる仕事に興味があり、大学時代に国際関係学を学び、休学してボリビアの旅行会社にてインターンシップをしました。この時はJICAのウユニ塩湖のゴミ問題のプロジェクトの調査案件などに携わりました。帰国後新卒で入構し、現在はベトナム、マレーシア、マーシャル、ミクロネシア、ボリビアの5カ国の主担当、ラオスの副担当をしています。

M 私自身の反省から、感情で判断せず、論理的に話すことが大切だと感じています。そんな時、中室牧子『学力』の『経済学』が参考になりました。実用的な本は、高橋歩&EXILE USA『NEO ZIPANG』。英語と日本語と豊富な写真で日本を紹介した本です。伝統文化だけでなく、日本が誇れるもの、例えば治安を守る警察、公衆トイレ、自販機、食品サンプルなども掲載されています。

O きれいな景色を撮影することです。特にパタゴニアやウユニ塩湖をはじめ、中南米の大自然に魅了されました。





／ お話を伺ったのは ／

いとうあきのり
伊藤明徳さん

視聴覚教育 / 1989年度3次隊、
SV / 視聴覚教育 / 1996年度0次隊・長野県出身

PROFILE

1990年に青年海外協力隊としてPNGへ派遣され、SV、専門家や技術協力プロジェクト総括、UNICEFアドバイザーなどを歴任。30年来、PNGの教育開発に従事し、2020年からはJICA初等理科教員養成校強化プロジェクト総括を務め、PNG在住。日本パプアニューギニア協会支部長を務めるほか、15年にPNG政府より公共サービス功労勲章を、23年に在日パプアニューギニア全権大使より在外公館長表彰を受賞。



さまざまな部族の文化が残るPNG (笹瀬さん提供)

派遣国の横顔

知っていますか？ 派遣地域の歴史とこれから 〈パプアニューギニア〉

多言語・多文化が息づく南太平洋の“大国”、

パプアニューギニアの基礎知識



パプアニューギニア独立国

面積：約46万平方キロメートル (日本の約1.25倍)
人口：約895万人 (2020年、世界銀行)
首都：ポートモレスビー
民族：メラネシア系
言語：英語 (公用語) の他、ピジン英語、モツ語などを使用
宗教：主にキリスト教。祖先崇拜など伝統的信仰も根強い
※2022年10月13日現在
出典：外務省ホームページ
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/png/>

派遣実績

派遣締結日：1979年8月24日
派遣締結地：ポートモレスビー
派遣開始：1980年7月
派遣隊員累計：797人
※2023年1月31日現在
出典：国際協力機構 (JICA)

独立当初から教育などの隊員が現地へ 貧しくても飢えることのない 支え合いの国

本土と大小600の島から構成され、800もの言語があるとされるパプアニューギニア。治安の悪さが伝えられることもあるが、人に優しい国だという。



教科書開発の最終段階で実施した、
模擬授業ワークショップでの指導風景

「現地に入れば周りの人が守ってくれます。親日的な人が多く、温かい」。元パプアニューギニア (以下、PNG) 隊員で同国に長く関わる伊藤明徳さんは言う。「ほとんどの隊員が好きになり、また戻りたくなる国です」。

国土はニューギニア島の東半分と周辺の島々から成る。人口は約895万人、面積は日本より大きく、いずれも太平洋島しょ国の中で最大だ。国名の起源は16世紀、現在のニューギニア島に上陸したポルトガル人がマレー語で縮れ毛を意味する「パプア」と名づけ、その後によって来たスペイン人がアフリカのギニアにちなんで「ニューギニア」と名づけたことに由来するといわれる。19世紀にはイギリスやドイツの支配を受け、第1次世界大戦後はオーストラリアの統治下に置かれた。第2次大戦中の一時期には、日本軍がニューブリテン島のラバウルに進駐していた。

戦後、ニューギニア島の東側は国連の信託統治領としてオーストラリアの統治下に入り、1975年にPNGとして独立。80年に協力隊派遣が始まった。警察学校に合気道隊員、公共事業省に自動車整備隊員が派遣され、その後は名門校のソゲリ国立高校に日本語教師隊員が派遣されるなど、教育・農業を中心に派遣先や職種が拡大した。

教育はPNGが長らく抱える課題の一つで、政府の教育改革に日本も支援を行ってきた。2014年にカリキュラムの刷新が決まった際は、JICAの協力で教科書・指導書を開発する「理科教科書の質の改善プロジェクト」が立ち上がり、伊藤さんが総括を務めた。20年に同国初の国定教科書として理科教科書を導入している。

部族ごとに独自の言語があるとされるPNGは、「世界で最も言語が豊富な国」(伊藤さん)。公用語は英語で、学校教育も英語で行われている。同時

に、文法や発音をわかりやすくした「ピジン英語」も広く使われる。

失業者や生活困窮者が多く、犯罪も多いことから治安上の問題もあり、長らく女性隊員の派遣はほとんどなかった。一方、「PNGは餓死のない国」と伊藤さんは言う。「ヤマイモやバナナはどこにでもあって自給自足でき、お金のない貧しさはあるが、子でかくんで元気のある豊かな国です」。仲間が苦しんでいる時に支え合つのが、部族を基盤とした「ワントク」というグループで、語源は一つの言葉「ワン・トーク」とされる。豊かな自然の中で、ワントク社会が多様な言葉・伝統文化を継承し、国のアイデンティティをつくっている。

国の省庁も含めて隊員の派遣先にはまだまだ課題が多いだけに、「現場で工夫し、改善する余地が多くある国です」と伊藤さんは隊員活動に期待を込める。

にしむらゆうじろう
西村祐二郎さん

日本語教師／1998年度1次隊・埼玉県出身

PROFILE

大学時代、畜産を専攻するが、「何か違う道を」と日本語教師の勉強を始める。以前からの興味に加え、大学の研究室に東南アジアからの留学生がいたことなどもあり、協力隊に応募。現在は、コンピュータの専門学校で留学生の日本語教育やIT関連の授業および生活指導を担当する。協力隊OVらと共に『パプアニューギニアの日本語教育-40年の軌跡とその意義-』の編集を担当した。



日本文化紹介に力を入れた西村さんの授業風景



活動で訪れた村の住民たちと。実地でチェーンソーによる製材法などを伝えた

おぜかずのり
小瀬一徳さん

製材／1993年度2次隊・奈良県出身

PROFILE

井戸を支援するテレビCMなどをきっかけに世界に関心を持つ。欧州への語学留学を検討していたが、実家が林業家で、林業関係の職種があることを知り、協力隊へ。帰国後、商社に勤務し、貿易に関する知識を身につけ、2005年に独立しPNGとの貿易を開始。日本から中古のパソコンや車を輸出し、バナビーンズなどを輸入。「Vanilla House」の屋号で事業を行っている。



活動の舞台裏

隊員らによる
PNGの日本語教育の歴史を1冊に

2022年、西村祐二郎さんらPNGの日本語教育に携わった隊員OVや元専門家たちが、PNGで日本語を教えた20人以上の隊員OV・元専門家の寄稿を集めた書籍を出版した。

「帰国後に、元JICAボランティア技術顧問の佐久間勝彦先生から『ソグリ国立高校の日本語教育小史』をまとめてみませんか、と話があったことからスタートしました」と西村さん。西村さんの前任隊員だった長岡康雅さん（日本語教師／1995年度3次隊）や、隊員・JICA専門家などとして長くPNGに関わる伊藤明徳さん、元専門家の荒川友幸さんを交えて打ち合わせを行い、編集作業が始まったという。

同書には「着任当初は前任者のニックネームで呼ばれ続けて何をやるにも比較され、落ち込んだ」（長岡さんのエピソード）など、日本語教育に限らず、多くの隊員にも通ずる苦勞談が収録されている。西村さんは編集活動を振り返り、「今回、PNGで日本語を学んだ元学生たちにSNSなどでアンケートを依頼し、ウェブ上で二十数年ぶりに教え子たちと再会することができました。私と2人で撮った写真や私からの手紙を大切に持っている学生もいて胸が熱くなりました」と語った。

『パプアニューギニアの日本語教育
-40年の軌跡とその意義-』
(デザインエッグ発行)



日本語と共に日本の心を
離れても途切れない絆

高校生の頃、アフリカでの獣医師隊員の活動を紹介する記事を雑誌で目にし、いつか協力隊に参加したいと考えようになったという西村祐二郎さん。1998年から2年半、日本語教師の職種で活動した。

配属先は、80年代にODAで日本語教育が始まり、専門家や隊員の派遣が続いていたソグリ国立高校。西村さんの派遣時、往年の名門校はレベルが低下し、校風も乱れ始めていた。約20年続いていた日本語の授業も、一時は必修科目だったが、当時は選択科目の一つとなり、履修者も減っていた。

PNGに進出している日本企業は少なく、大学や留学で日本語学習を続ける機会もほとんどない。「将来に生かすにくい日本語を教える意味とは何か、常に考えながらの活動でした」と西村さんは振り返る。そして、できるだけ日本人に合わせることで、日本の文化を知ってもらうことを大事にした。日本の文化・社会や日本語を通して、学生たち自身の文化や社会を顧みる機会にしてほしいと思ったからだ。

PNG国内で日本人に出会う機会は少ないため、運動会や、他校配属の日本語教育隊員と企画した日本語のスピーチコンテストなどの時には、隊員や現地の日本人にできるだけ学校へ来てもらった。こうした時に話ができる



日本に関連する物でいっぱい日本語教室

住民と通わせた心
派遣中も今でも

「誰もが好きになり、戻りたくなる国」。活動は終わっても関係は続いた。そのきっかけとなった活動を追った。

憧れの板の間の家を建設
森の維持・再生へ植林開始

1993年から3年間、パプアニューギニア（以下、PNG）で製材隊員として活動した小瀬一徳さんは「多くの家が、大きな柱にヤシの葉で屋根や壁を造っていて、床はヤシの樹皮や竹、籐を編んで造った不安定なものが大半でした」と振り返る。

小瀬さんの配属先は、PNG北部のマヌス島などを管轄するマヌス州自然資源局森林課。住居開発普及員として、伐採した木を製材し、それを資材として使う家の建て方を紹介した。同局は、生活の改善に向けて板材などを使った家造りを推進し、そのため各村にチェーンソーを1台ずつ配布していた。小瀬さんは州内の島をボートで回り、村に1週間から2週間滞在。共有地にある杉やラワンの大木を切り倒し、チェーンソーの使い方や木の加工方法

を説明しながら、実際に角材や板材を作り、家を建ててみせた。「これまでの家の隣に新しい家を建てました。住民にとっては憧れの家。特に板を使った固い床は、みんな喜んでいました」

学校の机を作ることも多く、村によつては病院や教会の骨組みを造った。余裕のある村人の中には自分でチェーンソーを購入する人もいた。

当時、現地ではある問題が起きていた。それは、「道路を造つてあげる」として、大量の木を伐採する東南アジア企業の活動だった。「伐採の跡地は赤土むき出しの荒地で、まさに森林破壊のイメージどおりの土地になっていました」。木は日本に輸出されていたことが後にわかった。小瀬さんにとっては衝撃だった。

PNGの熱帯雨林では、多少の樹木を伐採する程度なら周囲から新たに新芽が芽吹き、森林は保たれる。そのため植林という考え方も習慣もなかった。しかし、大量伐採の跡地では森は自然に再生しない。「子どもや孫の代に木がないことになりかねない。しかも、元凶には日本も含まれていました」。

2年の任期が終わる頃、小瀬さんは植林を始めることを思い立ち、相談した。同行や現地の人たちも賛同してくれた。活動期間を1年延長し、その期間はほぼ植林の活動に充てた。在来の

樹種で、現地のニーズのあるものを苗木まで育て、荒地地に植えた。

小瀬さんは「親日的な人たちに支えられ、活動中、苦勞はほとんどなかった」という。ただ、マラリアには何度かかかった。「そのうちの1回は41度の熱が続き、不安で仕方ありませんでした」。他の隊員から薬をもらって何とか乗り越えたが、「それがなかったら、命がなかったかもしれません」。

帰国した小瀬さんは、大学を経て商社に勤務。その中で、PNGのような途上国の農家が、先進国の企業の買付けの都合に振り回される構図に胸を痛めた。そこで2005年に独立、PNGのバナビーンズなどを日本に輸入する仕事を始めた。「事業を始めた頃に現地へ入り、『安定的に購入できるように日本市場を開拓するから、農家の皆さんにも頑張つてバナラを栽培してほしい』と頼み込みました。協力隊時代の任地ではなかったのですが、マヌス島で活動したと言うと、みんな快く協力してくれました」。

今年、コロナ禍を経て3年ぶりに、農民たちと顔を合わせる予定で、それが待ち遠しいという小瀬さん。「3年間の活動中、現地の人によく面倒を見てもらい、パプアニューギニアが気に入りました。そして、今でも交流が続いています。これは一生続く関係です」と断言する。

今年、コロナ禍を経て3年ぶりに、農民たちと顔を合わせる予定で、それが待ち遠しいという小瀬さん。「3年間の活動中、現地の人によく面倒を見てもらい、パプアニューギニアが気に入りました。そして、今でも交流が続いています。これは一生続く関係です」と断言する。

活動の舞台裏

精霊とシェルマネー

PNGでは伝統的な文化や習俗が今も残る。その中に精霊とシェルマネー（貝の貨幣）がある。

笹瀬正樹さんが派遣されたニューブリテン島のココボラやラパウルなどに暮らすトーライ族の間には、円錐形の頭と木の葉に覆われた胴体が印象的な精霊トプアンの伝承が残っている。年に数回、マスク・フェスティバルやお祝いなどの場に、トプアンに扮した住民が現れる。「誰がトプアンになっているかは、絶対に明かしてはいけない」（笹瀬さん）。トプアンになるためには、クリアしなければならない儀式もあるが、その詳細も秘密とされている。

トプアンが踊りを見せると、村人たちがひもに通したシェルマネーでトプアンをたたいたり、シェルマネーを投げつけたりする。かつて貨幣として広く流通していたシェルマネーは、現在では主に「ご祝儀」として使われている。シェルマネーを換金することも可能で、学費の支払いなどで使われることもあるようだ。



精霊「トプアン」の踊り。 笹瀬さんが離任時に受け取ったシェルマネーを通したひもでたく 贈答用のシェルマネー

市場などでは1〜2メートルのひもに通しただけのシェルマネーも売られているが、特別な機会には、職人が何重にも重ねて作った贈答用のシェルマネーを贈るのがしきたりだ。

「2年間の活動を終えて離任する時、生徒や保護者、同僚たちがお金を出し合って準備してくれた何重にもしたシェルマネーをプレゼントしてもらいました。そのシェルマネーは今も、大切に持っています」

QRコード 笹瀬さんたちが制作した
ミュージックビデオの全9曲ダイジェスト版
<https://youtu.be/19Ztjn4-zxo>



課外で試みた活動の一つが「紙芝居」。ポイ捨てや窃盗をテーマにモラルを教える内容で、ピジン英語を使って読み聞かせた

笹瀬さんの授業風景。学校では数学と理科を教えた



笹瀬正樹さん

小学校教育 / 2014年度3次隊・静岡県出身

PROFILE

教員養成系の大学・大学院で、教員を目指して学ぶ。大学院修了後に協力隊へ。活動終了後、タンザニアで教育支援の活動に参加した。「日本の教育現場は、大学の同期生たちの世代が中堅となり、支えている。自分は海外での経験を生かして実践を続けたい」と、海外での教育の活動に引き続き力を入れる。

よう、初級会話に力を入れ、ひらがな指導をやめて、ローマ字のみを使うようにした。さらに、日本を知ってもらうため授業で日本の写真やビデオを紹介し、教室を博物館に見立て、壁を日本の飾りや日本事情についての展示物などでいっぱいにした。受講者が少ないクラスでは、学生たちと一緒にそばやカツ丼を作って食べた。ある学生は「毎回、日本語の授業が楽しみです。教室の中は日本で、50分の授業の間、日本への旅行ができるからです」と感想を書いた。

一方、校内の風紀低下は深刻だった。西村さんによれば、現地の人の大半は酒類に弱いのだが、当時、思春期の学生たちの中には刺激を求めてか密造酒を造って宿舎の屋根裏に隠して、夜な夜な酒宴に興じる者もいた。見つければ停学となり、停学となった学生の多くは退学していた。ある卒業式の直前、数人の学生が飲酒し、そのままに出た。その中に、長く日本語学習を続けてきた「弟分」のような男子学生がいた。学校では卒業式で各科目の成績優秀者を最後に表彰していて、西村さんは彼を成績優秀者として表彰するつもりだったが、「日本人がどのように行動するか示したい」との思いがあり、他の科目では酔った学生が表彰される中、日本語の表彰は見送った。卒業式後、「お酒を飲んでいない」と言い張り聞かせをした。

読み聞かせを始めた理由の一つが、子どもたちが本を読む環境が整っていないことだった。図書室がある学校は少なく、あっても鍵がかかっていて自由に中に入れなかったり、難しい英語で書かれた本しかなかった。自身の配属先だけでなく、長期休みなどには各地の小学校などを回ったりもした。

もう一つの取り組みが、オリジナル音楽CDの制作だった。PNGは音楽にあふれていて、ギターや作詞・作曲が得意な子どもたちも多く、よく「先生の歌、作ってあげるよ」と声をかけられた。しかし、「学校での評価基準は、主要科目の試験か、人気のあるラグビーしかなかった。どちらでも活躍

る、酔っぱらった彼と別れることになった。そして、西村さんは活動期間を終えて帰国した。

「日本人の先生に日本語を習ったことが思い出として残れば、それが成果」と西村さん。しかし、PNGでの活動を通じて関係は途切れなかった。飲酒によって寂しい別れをした学生は2年後、日本の文部科学省の国費留学生として専門学校で電気技術の技術を学ぶために来日。滞在中の彼を、西村さんは何度も自宅や実家に招いて楽しい時間を過ごしたという。

西村さんは現在、コンピュータの専門学校で留学生に日本語やIT技術を指導している。その傍ら、漢字の成り立ちや書き順を学びながら漢字を学習するビデオ教材なども制作。「今後、日本語のオンライン教材を作って、もつと多くのPNGの人に日本語を勉強してもらいたい」と、今も、日本語指導やPNGとの関係が続く。

ピジン英語も覚えて関係が密に
音楽CD制作が生んだ自信

大学時代から小学校教員を目指していた笹瀬正樹さんは、大学院への進学前、海外でのスタディツアーに参加した。そこで、「授業を受ける子どもたちの目が日本と全然違う。生き生きとしている」と衝撃を受けた。「いつか

できない子どもたちは教室でも寂しそうに見えた」。そこで思いついたのが音楽だった。

「町の良きや社会の問題を取り入れた曲と一緒に作り、CDにしたい」と校長や同僚たちに話すと、「ぜひやろう」の声が返ってきた。子どもたちも「挑戦したい！」と乗り気だった。

授業の準備にCD制作の作業が重なり、「徹夜になることもよくあった」と笹瀬さんは苦笑いするが、「レコーディングの時の子どもたちのキラキラした目を忘れられない」という。レコーディングが終わった直後、歌を褒められた生徒が「ねえ先生、僕の声そんなに良かった!？」と嬉しそうに声をかけてきたこともあった。「曲もCD

必ず、海外で子どもたちに教える」と決意し、大学院の修了に際して実行に移すことにした。そして、2015年1月、小学校教育隊員として、ニューブリテン島のココボラの小学校に派遣された。

派遣当初は生徒たちも緊張気味だったが、慣れてくると授業中ざわつくようになり、菓子を食べる生徒まで出てきた。同僚の教員に相談すると、同僚は生徒に理由を聞いてくれた。「先生が話していることがよくわからない」「友だちに聞いたたりして、話してしまった」。

というのも、高学年ともなれば8割くらいの生徒は英語を理解できるが、中にはピジン英語しかわからない生徒もいる。また、現地の英語の発音は独特だった。英語が苦手という意識もあつた笹瀬さんは、英語とピジン英語の習得に力を入れた。半年ほどたつ頃には、英語にも慣れ、さらに半年がたつた頃からは、英語とピジン英語の両方で説明するようにした。「ピジン英語で冗談を言うことで、子どもたちとの距離が縮まりました」。

授業にも慣れてきた笹瀬さんは、授業外でもさまざまな取り組みを始めた。その一つが、モラルを学ぶ紙芝居。ゴミのポイ捨てと、物を盗む行為をテーマに物語を作り、A3サイズのスケッチブックに絵を描いてピジン英語で読

も自分たちで作れたことで自信や達成感を持ち、勉強にも思い切り打ち込めるようになりました」。

PNGでの生活や活動は、笹瀬さんのことも大きく変えたという。楽しい時には思いきり笑い、悲しい時には涙を流してわんわん泣く、喜怒哀楽にあふれた現地の人と接したことも大きい。「日本で過ごしていた時は、笑顔のつくり方が分からなかったけれど、現地では自然に笑うことができました」。

笹瀬さんはその後、タンザニアで日本のNGOが運営する学校のスタッフとなり、海外での教育に関わり続けている。いつか原点となったPNGでまた仕事をし、恩返しをしたいと強く思っている。

専門家に聞きました！ 失敗に学ぶ 現地で役立つ人間関係のコツ



今月の教える人 わたなべまさゆき
渡邊雅行さん

ネパール／作業療法士／1986年度1次隊・愛知県出身

隊員時代はネパールの首都・カトマンズのリハビリテーションセンターで活動し、入所者の機能訓練や日常生活指導に従事。任期延長して取り組んだコミュニティ・ベースド・リハビリテーション(CBR)がライフワークとなる。常葉大学准教授を経て、現在は富山県内の精神科病院で作業療法士・理学療法士として勤務。JICA海外協力隊技術顧問(リハビリテーション分野)を務める。

今月の
お悩み

今月のテーマ：任地に頼れる相手がない

地方の町に配属されたばかりで、
頼る人もいなくてつらいです

(コミュニティ開発／男性)

地方にたった1人の日本人として赴任したのですが、カウンターパートや配属先の同僚たちは忙しくて時間が取れず、現地での生活や活動を始めるにあたって、必要な情報を気軽に聞ける相手がないことに困っています。

地域社会にもう少し溶け込むことができれば、何かあった時に相談したり助けを求めたりできる人ができて少しは楽になるのではないかと思うのですが、まだ言葉が拙く尻込みしがちで、どのようにアプローチすべきか悩んでいます。

渡邊先生
からの
アドバイス

活動の序盤では 暮らしの拠点と人間関係づくり に注力するとよいでしょう

任地に配属されたばかりの時期は、何かと苦労しますよね。

私が協力隊員としてネパールに派遣された時、最初の半年ほどは言葉が拙く、しかも配属先のリハビリテーションセンターで要請を出した施設長がすでに辞めていて、カウンターパート(以下、CP)がいないまま活動を始めることになるなど、現地での生活や活動の態勢が整わない状況に苦労しました。

幸いに仕事がない状況ではなかったのですが、日本の作業療法の現場では見たことのない種類の障害を目的の当たりにしたりと、当時まだ臨床経験の少なかつた私には大変でした。ストレスのためか、最初の半年間は不眠症にも悩まされました。隊員連絡所(ドミトリ)で会った同期隊員に眠れない悩みを話したところ、どうしたわけかその夜から眠れるようになって解決したのですが、配属先が別のCPを用意してくれたのはさらに数カ月後だったので、落ち着か

ない状況が1年ほど続いたことになりました。

周囲の助けが少ない状況で、早く活動を軌道に乗せなければと焦ることもあるかもしれませんが、最初は言語習得を中心に、人間関係を構築することや、生活上の拠点をつくることに集中するのが大切でしょう。それで周囲との関わりが良くなれば、中盤以降の活動はおのずと展開していくものです。

まず言語の問題については、私の場合CPを頼れなかったので、任地の子どもたちに「あれは何?これは何?」といういろいろ聞いて語彙を増やしていました。おかげで幼稚な話し方になっていたかもしれませんが、子どもは概して時間に余裕があるので、よくつき合ってくれました。お年寄りの方に聞くのもよいでしょう。

人間関係づくりでは、職場の人らが昼食に誘ってくれたり、家に呼んでくれたりした機会は断らないようにしていました

し、なじみの店を持つことも有効だと思います。飲食店などで店主と親しくなれば、さまざまな情報を教えてくれると思います。特にCPがない頃には努めてそうしていました。

人とながりをつくる上での私自身の失敗経験は、ネパール人からわかりやすく道を教えてもらった時に、ただ「知っています」という受け答えをしてしまったことです。その時は特に気に留めていなかったのですが、後で共通の知人から、そのネパール人が私の態度に面食らっていたようだと言いました。隊員時代ではありませんが、イギリスのカメラ店で店主から製品のアドバイスをもらった時に「I know」とだけ答えてあげんな顔をされたこともありま

す。相手も、せっかくな親切で教えたのに淡泊な態度を取られればムツとしますし、話もそこで終わってしまいますよね。特に活動初期、頼れる人が少ない土地に一人でいる時は、わかって

いても「そうなんですか?ありがとうございます」と会話を広げるようなスタンスで、積極的に情報収集や交流の輪を広げていきたいところです。

派遣当初は言葉が不慣れなこともあり、つい面倒になって適当な対応を取ってしまったという隊員のケースもあります。人間関係づくりの面でも、語学力向上の面でも、積極的なコミュニケーションに勝るものはありません。以上をまとめると、

- ①時間のある人をつかまえて語学の基礎を磨く。
- ②食事などの誘いには積極的に参加する。
- ③行きつけの店をつくって店主と顔なじみになる。
- ④話を断ち切ってしまうような言葉・態度には要注意!

交流のチャンスは逃さずに。自身が大きく成長する機会でもある協力隊経験。こうしたことも心がけつつ、活動初期の苦労する時期を乗り越えていただければと思います。



この職種の 先輩隊員に注目!

～現場で見つけた仕事図鑑

#0018

「環境教育」

分類：人的資源

派遣中：40人(累計:1052人)

類似職種：コミュニティ開発、青少年活動、廃棄物処理

※人数は2023年1月末現在



CASE 1

なかのせひろあき
中ノ瀬寛明さん

インドネシア/2016年度4次隊・長崎県出身

PROFILE

大学で国際協力や環境、貧困などを学ぶ。自転車販売会社に3年半勤務した後、協力隊に参加。帰国後はIT企業勤務、JICA東北での勤務を経て、現在、NPO法人九州海外協力協会に勤務。JICA九州から受託している開発教育支援事業を担当。

配属先：南スラウェシ州ブルクンバ県環境・林業局

要請内容：地方都市の環境・林業局に所属し、地域の小中学校や高校を巡回し、生徒や先生に対して環境教育を行う。地域や学校を対象に廃棄物の管理、3R、コンポストなどに関する取り組みを実施する。



CASE 2

おざきゆき
尾崎友紀さん

ペルー/2014年度2次隊・東京都出身

PROFILE

大学で環境情報学を学ぶ傍ら、NGOラムサルセンターのスタッフとしてタイと日本の子どもの湿地保全の交流イベント運営などに携わる。新卒で協力隊に参加。大学院留学などを経て、現在、インテムコンサルティング株式会社に勤務し、技術協力案件に携わる。

配属先：国家自然保護区管理事務所パラカス事務所

要請内容：自然環境保護、生態系保護、海岸汚染防止に関して住民や観光客への啓発、環境教育の内容および教材・手法の改善、自治体など関係機関との連携、より効果的な環境教育実施のための支援。

「環境教育」の活動には大きく分けて、廃棄物や衛生など生活に密着した「ブラウン系」と、豊かな自然環境の保全に取り組む「グリーン系」がある。行政機関、自然公園などに配属され、教材・プログラム開発、イベントの企画、指導者層への助言、廃棄物処理の現状調査やゴミ処理・収集ルート分析・モニタリング、エコツアーリズムの提案など、多様な活動を行う。資格や専門知識よりも、自らの経験やスキルを生かして、任地の課題を明らかにし、わかりやすく魅力的な活動につなげていく力が求められる。

CASE 1 子どもたちにゴミ問題を 根本から考えてもらう授業

インドネシアの南スラウェシ州のブ



自分のお気に入りの場所を描いてという中ノ瀬さんの提案に応え、さまざまな場所の絵を掲げる児童たち

人々にも呼びかけると協力してくれて、毎回大量のゴミが集まりました」

活動終盤には、前任の隊員が温めてきた企画を引き継ぎ、小中高生のゴミ処理施設見学ツアーも実現させた。配属先には参加校の募集から見学先の調整、当日の運営を主体的に行ってもらった。

「ツアーを実施することによって、同僚たちに生徒たちの反応を直接見てもらうことができ、実際に体験して学ぶ大切さを感じてもらえたように思います。ゴミのポイ捨てなどの行動をすぐに変えることは難しいと思います。でも、関わった人の心に引くかかもの生まれると嬉しい。環境問題は地道に取り組むことが大切だと学びました」

CASE 2 豊かな自然保護区で働く職員が 環境教育に取り組めるように

ペルーの首都リマから南に約250km、太平洋に突き出たパラカス半島。半島周辺には栄養豊富なフンボルト海流が流れ、フラミンゴやペンギンなどさまざまな生物が生息する。多くの渡り鳥が飛来する湿地を擁し、1992年には同国で初めてラムサール条約に登録された。国立自然保護区管理事務



①ペンギン(約60cmで4kg)と同じ重さの石を探す子ども。140cmあるのに2kgのフラミンゴと比べ、飛ぶ鳥と飛ばない鳥の違いや骨の密度の違いについても話した
②尾崎さん自身も驚いたオタリア(※2)の大きさを、ゴミ袋で作った着ぐるみで表現。実物を見たことがない子どもたちの関心を惹いた

ルクンバ県環境・林業局に環境教育隊員として赴任した中ノ瀬寛明さん。メインの活動は、地域のゴミ問題解決のために、学校を巡回し校内環境やゴミ分別方法のアドバイスをし、コンポストの普及や環境をテーマにした授業を行うこと。

配属は3代目で、中ノ瀬さんは市中心部から郊外の学校まで趣味の自転車を使って一人で巡回した。「町中のゴミのポイ捨てが多いし、分別もできていない」と感じた。「自分のお気に入りの場所を絵に描いてみよう」。活動を始めて9カ月がたった頃、中ノ瀬さんは小学校での授業の構成を変更した。

「それまでは単発授業が多く、ゴミのポイ捨てが自分たちの生活にどう影響するか話したり、分別方法をゲーム形式で教えることが多かった。中ノ瀬さんは、地域住民や子どもたちへの環境教育に取り組んだ。琵琶湖5つ分という広大な保護区の管理にあたるのが生物学者を中心とする25名ほどの職員で、パトロール、生態系の調査、観光客への対応、自然保護のための普及啓発・環境教育までを行っていた。

しかし、事務所の寮に住み込み、24時間体制の業務を目的にした尾崎さんは、職員はパトロールや生態調査に忙殺され、環境教育に手が回らないことに気がついた。「職員たちは、いいアイデアをたくさん持っていました。そこで私は同僚が環境教育に取り組みやすくなるよう生態調査や観光客対応などの業務を手伝いながら、絵画コンテストなどのアイデアの実現をサポートしました」

尾崎さんは毎月、近隣の小中学校で授業を行い、教材開発や授業の改善も行った。「配属先の環境教育用の予算が少ないため、手に入るもので試行錯誤しながら教材を作りました」。

まずは興味と関心を持ってもらい、そこから生態系や自然環境を考える人が育って欲しいという尾崎さん。動物

式で教えたりしていましたが、ゴミ問題に焦点を当てることを急ぐあまり、生徒になぜ環境を守ることが大切なのかを伝わっていない気がしたのです」

巡回先の学校の教師とも信頼関係ができ、連続した授業も行えるようになっていた。「絵なら勉強の得意不得意に関係なく自由に表現できます。お気に入りの場所にゴミがあつたらどんな気持ちになるのか想像してもらおうことから始め、段階を経て環境について考える授業を3回に分けて行いました」

子どもの見本となる大人の意識と行動の改善も必要と考え、同期の隊員たちとのアイデア共有から思いついた地域の清掃活動も行った。「地域の大人たちや先生、生徒に声をかけてゴミ拾いしながら、周辺の

の生態について教えた際には、ペンギンの模型を雑誌や古紙を丸めて作り、いろいろな大きさの石を用意してクイズでペンギンの実際の重さを当てて、体感してもらう工夫をした。日本の自然公園のビジターセンターの展示を参考にした。

回を重ねるうち、カウンターパートは刺激を受け、話すだけだった授業に写真や映像、クイズを取り入れるようになるなど工夫をするようになった。活動の終盤には、他の自然保護区に派遣されていた隊員2名と、同僚たちを対象にした「環境教育インタープリテーション(※1)研修」を企画した。「同僚たちは観光客などへの解説に慣れていませんでした。知識や情報をただ伝えるのではなく、他の生物や人との関係など背後にある物語を含めて、わかりやすく伝える能力を高めてもらうと考えました」。

JICA事務所の支援を得た結果、中南米7カ国の隊員とその同僚45名がパラカス自然保護区に集まり学んだ。「具体的な成果を説明するのは難しいのですが、同僚たちには環境教育の幅を広げる意識、興味や関心を残すことができたのではと感じています」

活動の基本

なぜ自然環境を守ることが大切なのか伝える努力を続ける
対象者が自ら考え行動に結びつくよう地道に働きかける

※1 インタープリテーション=自然・文化・歴史をわかりやすく人々に伝えること。知識だけでなくその裏側にあるメッセージを伝える行為。

※2 食肉目鰐脚類アシカ科オタリア属の海棲哺乳類。典型的な雄の成体は体長2.6m、体重300kg程度もある。

Text=工藤美和 写真提供=中ノ瀬寛明さん、尾崎友紀さん

シューカツ記

帰国後、内定までの
就職活動の方法を聞きました。

協力隊で思いどおりの 結果を出せなかった 悔しさを市の職員として “リベンジ”したい



今月の先輩

茅ヶ崎市役所
西村隆仁さん Takahito Nishimura

コストリカ/村落開発普及員(現・コミュニティ開発)
2011年度4次隊・大阪府出身

就職先：
茅ヶ崎市役所

茅ヶ崎市の概要：神奈川県茅ヶ崎市は相模湾に面し、気候も温暖という
自然に恵まれた環境の中、県下で7番目の人口24万の
都市に発展している。職員採用においては人物重視の
独自の採用試験「脱・公務員試験!」を行っている。

西村隆仁さんの略歴：
1984年 大阪府生まれ
2008年 4月 大学卒業後、山崎製パン株式会社入社
2011年 8月 同社を退社
2012年 3月 青年海外協力隊員としてコストリカに赴任
2014年 3月 帰国
2014年10月 茅ヶ崎市役所入庁

JICA海外協力隊ウェブサイト
「帰国隊員の進路開拓についての相談受付」

https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/counselor/

※カウンセラー/相談役により対応可能な日が異なりますので、あらかじめ電話またはメールでのご連絡をお願いします。



大学を卒業して民間企業に3年間勤めた後、協力隊に参加した西村隆仁さん。もともと国際貢献に興味はあったが、高校時代の同級生が協力隊に参加したことが決意を後押しした。
派遣国は中米コストリカ。要請内容は、家庭菜園を行っている住民に野菜栽培と食育の指導をすることだったが、なかなか広く浸透せず、手応えを感じられずにいた西村さんは、指導の対象を小学校の子どもたちにシフト。栄養や衛生面などの指導をしたいと1人で校長に交渉するところから始め、任期を終える頃には6校で授業をするまでに活動を広げていった。

1 協力隊時代 2012年3月～



上：食育の授業の一環として小学校内に学校菜園を作る西村さん
左：派遣先地域の住民に生ゴミコンポスタの作り方を説明する西村さん

コストリカ北部の厚生省の地方事務所に、3代目隊員として配属されました。要請内容は、炭水化物中心の食生活で栄養面に偏りがある住民に家庭菜園を作り、維持・活用することを促すため、栄養指導と農業指導を行うというものでした。前任者の活動により、やる気のある住民に野菜栽培が定着している一方で、それ以外の住民からはやる気を引き出すのは難しいと感じました。そこで、指導の対象を大人から子どもに替えることにし、小学校の校長先生に直談判した上で、食育・衛生・健康の授業をさせてもらうことにしました。授業では言葉の壁があったので、紙芝居を作るなど工夫もしました。私の活動に賛同してくれる同僚も現れ、最終的には授業をする学校を6校まで増やすことができました。

2 活動しながら公務員試験の勉強 2013年4月～

任期を終えるのが30歳手前になるので、派遣中に就職の準備をしないと20歳代までの応募条件のところには間に合わないため、1年たったら就職活動を始めようと考えていました。帰国後の進路を市役所に決めると、任期2年目に公務員試験の教材を取り寄せ、活動の合間に勉強も始めました。

しかし、この2年間の活動を、西村さんは「悔しかった」と振り返る。「『地域のため』と自分なりに頑張ったつもりですが、私が始めた授業は、私がいなくなっても継続するような成果になりませんでした」
この悔しさが、帰国後に市の職員という職業を選ぶ動機となった。
「住民の目線に立ち、課題を共有し解決するという活動をしなから、これは市の職員と同じだと思いました。そして、活動の続きを日本でやりたい、コストリカでできなかったことを日本でリベンジしたい、と強く思うようになりました」。西村さんは日本から公務員試験の教材を取り寄せ、活動の合間に勉強を始めた。

市の職員を選んだのは、環境教育隊員としてコストリカに赴任した同期の存在も大きかったという。

「市役所からの現職参加でしたが、ごみ分別のマニュアルの作り方、住民への広報など、経験に裏づけられたノウハウを持っていました。彼の仕事のやり方に感心させられたのも、市の職員に興味を持った理由の一つです」

茅ヶ崎市役所に入庁して、今年で9年目。「地域のために働きたい」という思いは今も尽きていない。

「20代は自分のために、30代は家族のために。40代を目前に、今後は周りの人たちのために頑張ってみようと考えています」

3 資格取得の専門予備校に入学 2014年4月～

公務員の募集は6～7月に始まるので、帰国後すぐに公務員試験の予備校に入学し、試験や面接のための準備をしました。どの市にするかは特にこだわりはなく、地元大阪や前職で勤務していた北海道、赴任する前に観光に行った鎌倉などをいくつかピックアップしました。その中にあったのが茅ヶ崎市役所でした。関西の人間なので茅ヶ崎のことは詳しく知らなかったのですが、海に近くていいと漠然と思いました。茅ヶ崎市役所の採用試験は人物重視のため公務員試験がなく、そんなところにも興味を引かれました。

4 第1次試験 6月

提出書類 ▶ 履歴書、エントリーシート

第1次試験は書類選考です。エントリーシートは、出題された内容について書くというものでした。テーマは、茅ヶ崎市役所で何をしたいかというような内容だったと思います。提出前には、市役所から現職参加していた同期の隊員に内容をチェックしてもらい、自分がやりたいことをただ書くのではなく、市の基本計画に落とし込むようにアドバイスをもらいました。

5 第2～4次試験 7～9月

2次試験は7～8人での集団面接、3次試験は個人面接とグループディスカッション、4次試験が最終面接で、副市長や部長との個人面接でした。協力隊経験者が珍しかったようで、どのような活動をしていたのか、非常に興味を持って聞かれました。入庁後、面接担当の当時の部長から「協力隊の話が面白かったから採用した」と言われたことを覚えています。

2014年10月 入庁

現在の仕事

最初の4年間は防災対策課に配属され、住民と連携し地域の防災を考えました。その後、東京五輪前にスポーツ推進課に異動。茅ヶ崎市は北マケドニアのホストタウンとなっていたため、選手団の担当者と交渉し受け入れの準備を進めました。結局、コロナ禍のために選手が来ることはなかったのですが、外国人との交渉には協力隊での経験も役立ったと思っています。22年4月からは収納課の総務を担当しています。行政に携わる上で税金の収納・管理を経験したいと思い、異動を希望しました。現在は、DX(デジタルトランスフォーメーション)推進の業務が中心となっています。



現在勤務している茅ヶ崎市役所の前で

先輩へメッセージ

私は現在、協力隊とまったく関係のない仕事をしていますが、そこで頑張った2年間は決して無駄ではなかったですし、経験は生きていると思っています。同期の隊員には、JICAの専門家や民間の開発コンサルタントになるなど、協力隊の延長線上で活動している人もいます。帰国後の就職では、協力隊の経験を生かすべきか悩むこともあると思いますが、どちらを選んでも間違いではありません。いろいろな視点を持ち、それぞれに合った選択をしていってください。

派遣から 始まる 未来



進学、非営利団体入職や
起業の道を選んだ先輩隊員

▶ 世界銀行 保健専門官

清水真理さん Mari Shimizu

タンザニア/村落開発普及員 / 2009年度4次隊・北海道出身



保健・栄養という軸からブレずに チャンスをものにして世界銀行へ

世界中の途上国に資金や技術の援助を行っている世界銀行で、保健専門官として働く清水真理さん。「機会を逃さないこと」と「軸からブレないこと」を大切に、人生を切り開いてきた。生まれも育ちも北海道。両親がJICA北海道センターの研修員をホストファミリーとして自宅に受け入れていて、「さまざまな国の人と交流するのが面白かった」と昔を振り返る。ただ、都市部と比べると多様な情報に触れる機会が少なく感じ、チャンスは逃さないように心がけてきた。

国際協力の道に進むことを決めたのは大学3年の時。交換留学で初めて訪れたアメリカで、「恵まれない国の発展のために働きたい」と決めた。アメリカの大学院で開発経済学の修士号を取得した後、青年海外協力隊に参加したのは2010年のことだ。

村落開発普及員として派遣されたのは、タンザニアの南部ムベヤ。タンザニアは世界でもHIV/AIDS陽性者が多い国で、特にムベヤはHIV感染率が約9・2%と全国平均を大きく超えていた(08年時点)。清水さんは現地NGOの研修を受け、HIV/AIDS陽性者の栄養向上プログラムを担当することになった。

「馬小屋で横たわっていた女性患者の姿が今でも忘れられません。傷口からは黄色い液体が出ていました。HIVに対する間違った認識により、適切な

薬や食事を与えられることなく、家族から隔離されていたのです」この女性に限らず、差別や偏見、経済状況によって必要な情報や薬、食料が行き渡らず、悲惨な環境に置かれている人と多く接した。一方、アメリカの出資により小児HIV診療センターが開設され、子どもたちの体調が改善していく様子も目の当たりにした。「この時、『保健と栄養』を今後のキャリアの軸にしようと思った。どの人にも平等な機会を与えてくれる基盤だと実感したからです」

帰国後、開発コンサルタント会社を2社経験し、世界銀行から奨学金を得てボストン大学大学院で公衆衛生学修士号を取得。33歳で国連機関への登竜門であるジュニア・プロフェッショナル・オフィサー(JPO)にも合格した。

18年からの3年間、念願のユニセフで栄養担当官として勤務することもなかった。5歳未満児の急性栄養不良のプログラムと栄養分野の情報マネジメントを担当し、子どもの命と栄養の大切さをますます実感したという。

「栄養不良は貧困や知識不足、医療ケアの問題など、さまざまな要因が重なって起きます。国や組織によってアプローチは変わりますが、今の自分ができる最善を尽くしています」

21年には、「健康保険のプロジェクトに関わりたい」とJICAスーダン事務所に移り、同時に公衆衛生の博士

号の勉強も始めた。ところが、同年10月に軍事クーデターが勃発し、プロジェクトが中断。家庭の事情もあり、退職し、次のキャリアとして選んだのが、世界銀行だ。

「現在は東ティモール事務所に赴任しています。世界銀行ではプロジェクトを作成する国の医療サービスへのアクセスや疾病状況など、保健システムについての分析業務が非常に重要な役割を果たします。私は生物統計学や疫学を学び、エビデンスに基づいた情報を出せるので、その強みを生かせたらと思っています」

清水さんがここまで着々とキャリアを築くことができたのも、機会を逃さなかったからだ。「常に2〜3年先を見据え、戦略的に動いています。希望

のポストに就くためには何が必要で、何が足りないかをリサーチし、博士号が必要なら大学院、知識不足なら研修に参加して勉強する。知人からのアドバイスも大切にしています。国連で働く協力隊時代の友人や進路相談カウンセラーとも今も交流があります」。

活躍の裏では「苦しいことのほうが多い」とも話す。「本当にこれでよかったのか、もつと楽な道があったのではないかと考えることもあります。それでも大事なのは保健・栄養という軸からブレないこと。協力隊時代、現地の方々と同じレベルの生活をしたことは今でも役立っています。これからは、世界の人々が少しでも経済的な負担なく医療サービスを受けられるような場所づくりに貢献したいです」。

清水さんの歩み

1983年、北海道で生まれ育つ。幼少期の将来の夢は医師。



高校時代によい先生に出会い、勉強が面白くなりました

2007年、大学3年生の時に、交換留学生としてアメリカに1年間留学。

大学卒業後、アメリカの大学院で開発経済学の修士号を取得。

2010年、青年海外協力隊としてタンザニアへ。



協力隊に参加したのは、国際協力で活躍する人たちの多くが協力隊からキャリアをスタートさせていたから。スキルのない自分でも機会をつかみやすいと思いました

2012年より4年間、開発コンサルタント会社を2社経験し、JICAの保健分野の事業に従事。その後、渡米し、公衆衛生学の修士課程を修める。



医療従事者ではない私が今後どのように保健分野でキャリアを構築すべきか考えた時、公衆衛生の学位が必要だと思い、世界銀行の奨学金に応募しました

2018年、公衆衛生学修士号を取得。



勉強に集中し、2年間のプログラムを1年半で修了しました。保健と栄養の分野で仕事ができるユニセフで働きたいと思っていたので、JPOに応募。1年くらいかけて情報収集や準備を行いました

2018~21年、ユニセフスーダン事務所、シエラレオネ事務所勤務。

2021年、JICAスーダン事務所勤務。

2022年、世界銀行東ティモール事務所に勤務。



業務量が多くて大変です。東ティモールは初めての国ですが、内戦を経験している国のバックグラウンドがスーダンやシエラレオネに似ているので、今までの経験が役立っています



① JICAスーダン事務所にて、新しいプロジェクト立ち上げのため助産師育成校を視察する清水さん
② 協力隊時代。学校や村落でのHIV予防啓発活動や人材育成にも携わった
③ 世界銀行東ティモール事務所に勤務する清水さん



あの場所、
地球の、
あの日、
あの場所で。

任地の思い出を聞きました。

自然豊かなガボンは
マルミミゾウにご用心

アフリカのガボンは、人口が約228万人（2021年、世界銀行）と名古屋市くらいの規模に対し、国土面積は日本の約3分の2もあり、その8割以上が森林で、手つかずの自然が多い国です。

野生動物の宝庫であり、現地ではレストランや各家庭でジビエ料理も振る舞われています。

夜に南部の国立公園に行くと、ワニ狩りができます。食用に捕獲する場合もあれば、練習として子ども用のワニを捕まえて放すこともあります。懐中電灯を水面に向けてワニの目が反射して光るので、それを頼りに近づいて小さな子ワニを素手で

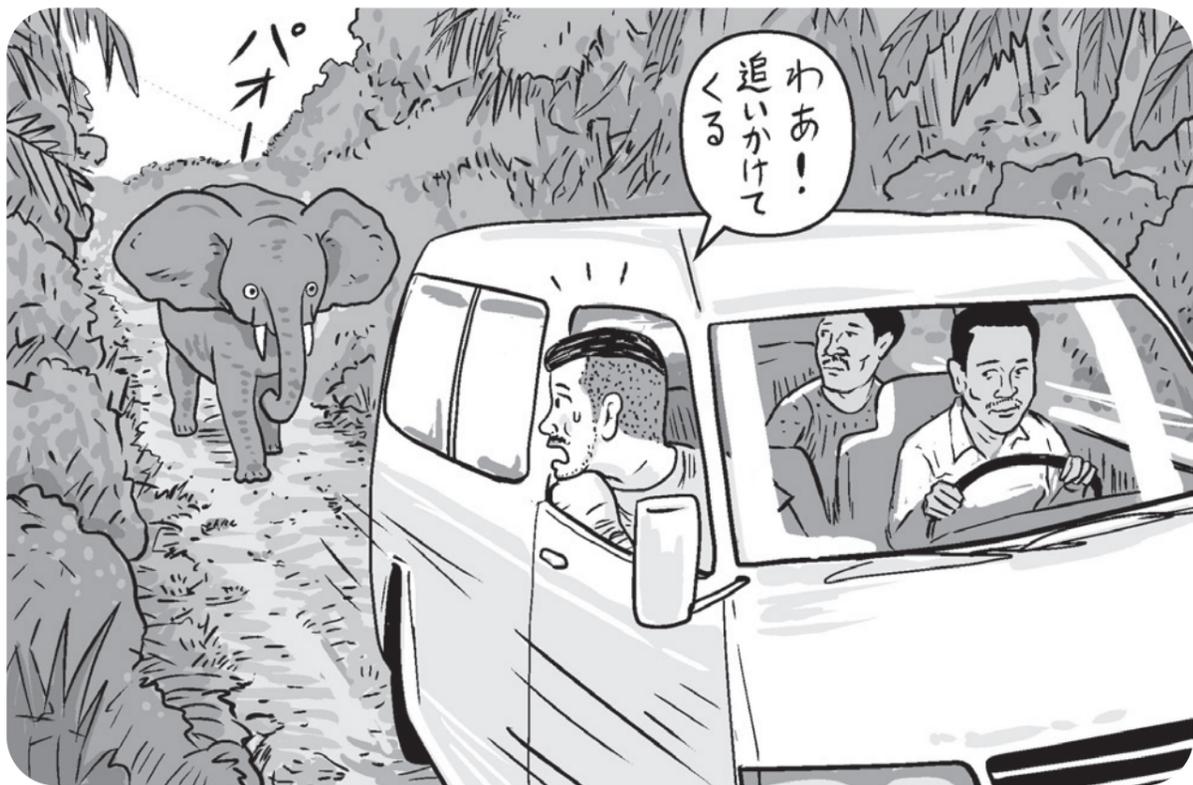


Illustration = 牧野良幸 Text = 阿部純一（本誌）

永井大策さん
ガボン／養殖／2014年度1次隊・
京都府出身

ある朝、国立公園を散歩していて、ばったりゾウと鉢合わせしてしまっただけには、本当にびびりました。相手も驚いたようで、お互いに後ずさりして事なきを得ましたが、もしゾウが興奮していたらと思うと、今でも体が震えます。

つかむのですが、親ワニも近くにいるかもしれないと思うと、見ていて気が気ではありませんでした。

ジャングルには多くの野生動物が暮らしていますが、ふつう動物は警戒心が強いので、人の気配を感じると逃げます。ところがゾウは別でした。ガボンには、マルミミゾウが生息しています。アフリカゾウより一回り小さいのですが、とても気性が荒く、自分のテリトリーに入ってくると、容赦なく威嚇してきます。

活動中に養殖業者の方を訪問するため、乗り合いのバスでジャングルを縫う道を移動していた時、突然怒ったゾウが追いかけてきたことがありました。百戦錬磨の運転手さんも焦って、何とか逃げ切りましたが、この時は本当に怖かったですね。



1 2017年に外務省の事業で協会の委員から指導者2人をグアテマラへ派遣した際は、グラブ、バット、ヘルメットなどの用具も贈呈した。2 指導は男女代表クラスをはじめ中高生にも行った。現地での指導はゲーム形式のウォーミングアップから

待ってます、あなたを！
各界からのエール
From
公益財団法人
日本ソフトボール協会



途上国での普及を用具の支援などで協力

日本ソフトボール協会は1949年に設立されました。以来ソフトボールの普及と日本の競技力の強化を2本柱に事業を展開してきました。強化の面で記憶に新しいのは2021年の東京オリンピックで女子代表が見事、金メダルを獲得したこと。五輪チームの強化には15年から取り組んできて、6年越しの夢が実現しました。

競技性に注目されがちですが、ソフトボールは生涯スポーツとして健康の保持・増進を目的に発展してきました。投げる、打つ、走る、捕る、という体全体を使うスポーツであり、幼稚園の子どもたちから、若者、シニアまであらゆる層に楽しんでいただけます。ただ残念ながら、途上国では用具や指導者の不足によって、普及がままならないのが現実です。私たちは、17年にJICA「世界の笑顔のために」プログラムに参加し、ボツワナ、ウガンダ、ネパールにボール120球をはじめグラブ、バットなどを送りましました。このほか、外務省の事業や海外の協会との連携も行っていて、これまでに20カ国に用具を送ってきました。

野球が原型なので、アメリカ大陸や中南米を中心に広まったスポーツですが、アフリカ、アジアではまだメジャーとはいえませんが、そうした途上国への普及は、ソフトボールの大きな命題です。現在、世界は紛争や飢餓、貧困がはびこり、混んとしていますが、そうした時代にスポーツが人々に与える良い影響は大きいと思います。スポーツを通じて世界の平和に取り組んでいる最先端が協力隊員の方々と感じています。特にソフトボールの隊員の方々には、今後もできる限り用具の支援などでお手伝いできればと思っています。ソフトボールの魅力を世界につなげるべく、引き続き頑張っていたきたいと思います。



矢端信介さん
公益財団法人日本ソフトボール協会 事務局長
やばたしんすけ ●群馬県出身。高校時代からソフトボールを始め、大学卒業後、教員を務める傍ら指導を行う。ジュニア(U16・U19)日本代表のヘッドコーチ、2017年から「公財」日本オリンピック委員会においてナショナルコーチを歴任、22年から現職。

INFORMATION

JICA青年海外協力隊事務局からのお知らせ

NEWS

第6回全国OV教員・教育研究シンポジウム開催

2022年12月25日に「第6回全国OV教員・教育研究シンポジウム 協力隊を日本の文化にする～途上国経験を通して得られる力の活かし方～」がオンラインで開催されました。主催は、全国OV教員・教育研究会（※1）と国際協力機構（JICA）で、文部科学省、ESD活動支援センター（※2）に後援いただきました。コロナ禍のため3年連続オンライン開催となりましたが、国内外で教員を務める協力隊OV、派遣中の隊員、協力隊参加を目指す教員や学生など、約60人が参加しました。シンポジウムでは帰国隊員による実践報告「地域で生まれるつながりの可能性」や座談会「帰国後の教育現場で感じたこと」、佐藤真久東京都市大学教授による講義のほか、訓練所入所前の参加者に向けたアドバイス「訓練前までに準備すること」も実施。グループセッションでの意見交流ワークショップも行われ、参加者間で活発な意見が飛び交い、積極的な情報交換がなされました。

※1 JICA海外協力隊経験を持つ教員を中心に、協力隊経験を教育現場で生かすために組織した研究会。
 ※2 ESD（持続可能な開発のための教育）活動を支援する組織で、環境省と文部科学省が設立。



NEWS

初代ジョージア海外協力隊員2名が駐日大使に出発のご挨拶

2023年1月23日、JICA本部でジョージアの初代海外協力隊員となる内田梨沙隊員（日本語教育）と扇澤 舞隊員（青少年活動）が、出発の前にティムラズ・レジャバ駐日ジョージア特命全権大使にご挨拶しました。JICAは17年5月にジョージア支所を開設し、19年12月にJICA海外協力隊派遣取極を締結しました。20年度中にも初代隊員の派遣が期待されていましたが、コロナ禍により延期され、23年1月に初派遣が実現しました。ジョージアは99カ国目のJICA海外協力隊派遣国となります。両隊員は緊張しながらも活動の抱負と決意を述べ、大使からはJICA事業への感謝の意と、2人の活動への期待が述べられました。幼少期から長く日本に在住していた大使が扇澤隊員と茨城県つくば市の中学校の同級生であることもわかり、18年ぶりの再会に旧交を温める場面もありました。



（左から）青年海外協力隊事務局海外グループ沢田博美次長、JICA宮崎桂理事、ウチャ・ガベチャヴァ公使参事官、内田梨沙隊員、扇澤 舞隊員、ティムラズ・レジャバ大使、ダヴィド・ゴグナシェヴィリ専門分析員

NEWS

第1回 JICA帰国隊員社会還元表彰 3月6日まで募集受付、4月20日に入賞発表！

帰国後10年以内の協力隊OVで、国内外・公私問わず社会課題の解決に取り組んでいる方を表彰する『帰国隊員社会還元表彰』を今年度より開始します。事業目的の一つである「ボランティア経験の社会還元」事例を収集し好事例として紹介することで、隊員OVの社会還元の機運を高めると共に、より良い社会の実現を目指します。自薦・他薦は問いません。入賞は4月20日の青年海外協力隊の日（JICAウェブサイト）で発表予定です。

【募集期間】 3月6日（月）まで
【応募対象】 帰国後10年以内のJICA海外協力隊経験者で国内外・公私問わず社会課題の解決に取り組む方
【応募方法】 所定の応募用紙（Word）を記入しメールにて提出
 jvthd@jica.go.jp
【入賞発表】 2023年4月20日（木）
 青年海外協力隊の日
 JICAウェブサイトにて発表

<https://newsreader.jica.go.jp/news/20230113.pdf>



クロスロード

[2023年3月号]

第59巻第2号 通巻684号
 発行日 2023（令和5）年3月1日

編集・発行：独立行政法人国際協力機構
 青年海外協力隊事務局
 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1竹橋合同ビル

制作協力：一般社団法人協力隊を育てる会『クロスロード』編集室
 〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-28-7昇龍館ビル2階
 ログタイプデザイン・誌面デザイン：(株)AND
 印刷・製本：弘報印刷(株) 校正：佐藤智也

本誌へのご意見・ご感想をお聞かせください。
 アイデアも大募集中です。

今号の『クロスロード』はいかがでしたか。ぜひご意見やご感想を編集室のメールにお寄せください。「こんな記事があれば派遣先で役立つのに」「こんな記事なら読みたい」といったご要望やアイデアも随時募集しています。
『クロスロード』編集室
crossroads@sojocv.or.jp



編集後記

JICA事務局：P24みんなの教材づくり&アクティビティでのアイスブレイクはどのような劇をされたのか、場を和ませる楽しいものだったのではと想像しています。地域に合わせたアイスブレイクをしている隊員も多いと思います。ぜひ情報お寄せください。（脇田雄気）

クロスロード編集室：「直接会う、会話する、相手を理解する」ことは隊員活動の基本ですが、それは日本でも同じこと。特集で青年海外協力隊事務局の各課の皆様から直接国際協力やJICAボランティア事業への思いなどを伺い、改めて実感しました。（干川美奈子）

現在の派遣国数
63カ国

JICA 海外協力隊派遣現況

（2023年1月末現在）



（単位：人）

■ アフリカ地域

国名	一般	シニア
ウガンダ	28	1
ガーナ	34	
ガボン	13	2
カメルーン	20	
ケニア	41	
ザンビア	5	
ジブチ	8	
ジンバブエ	12	
セネガル	7	
ナミビア	11	
ベナン	8	
ボツワナ	14	1
マダガスカル	28	
マラウイ	20	
南アフリカ共和国	8	1
モザンビーク	16	1
ルワンダ	43	

■ アジア地域

国名	一般	シニア
インド	13	
インドネシア	6	
ウズベキスタン	8	2
カンボジア	26	
キルギス	7	
ジョージア	2	
スリランカ	5	
タイ	19	4
タジキスタン	1	
東ティモール	5	
フィリピン	2	
ブータン	21	6
ベトナム	33	
マレーシア	8	4
モンゴル	9	
ラオス	17	4

■ 大洋州地域

国名	一般	シニア
ソロモン	1	
トンガ	1	
パラオ	17	3
フィジー	4	

■ 欧州地域

国名	一般	シニア
セルビア	7	

■ 中東地域

国名	一般	シニア
エジプト	18	
チュニジア	16	1
モロッコ	4	
ヨルダン	24	1

■ 中南米地域

国名	一般	シニア	日系一般	日系シニア
アルゼンチン				2
ウルグアイ		3		
エクアドル	7			
エルサルバドル	8			
キューバ		1		
グアテマラ	22	1		
コスタリカ	8			
コロンビア	4			
ジャマイカ	2	1		
セントルシア	9			
チリ	4	1		
ドミニカ共和国	17		6	
ニカラグア	7	2		
パナマ	3			
パラグアイ	22	3	1	
ブラジル				23
ペリウ	3			
ペルー	15	1		
ポリビア	12	1	1	
ホンジュラス	6			
メキシコ	2	2		

■ 合計

	一般	シニア	日系一般	日系シニア	小計
派遣中 (男性/女性)	740 (315/425)	48 (37/11)	31 (11/20)	3 (2/1)	822 (365/457)
累計 (男性/女性)	46,590 (24,648/21,942)	6,612 (5,340/1,272)	1,575 (609/966)	550 (254/296)	55,327 (30,851/24,476)

一般 = 青年海外協力隊/海外協力隊 シニア = シニア海外協力隊 日系一般 = 日系社会青年海外協力隊/日系社会海外協力隊 日系シニア = 日系社会シニア海外協力隊

隊員めし

現地で作った日本食、日本で作る現地めし

ドミニカ共和国

● レシピ

- ① 具材用に卵焼きを作る。割った卵を溶く(味をつける場合はここで調味料を入れて一緒に混ぜておく)
- ② 油を引いたフライパンを弱火にかけ、①を少量入れて薄く焼きながらフライパンを傾けて端から巻いていく。焦げないように気をつけながら溶き卵を追加し、さらに焼きながら巻いていく
- ③ 具材用のツナマヨネーズを作る。ツナ缶の油を切り、マヨネーズとあえる
- ④ 具材(卵焼き、ハム、きゅうり、パプリカ、アボガドなど)を細長く均等に切る
- ⑤ ご飯にすし酢を少しずつ入れながら混ぜる
- ⑥ 巻きすに海苔を敷き、⑤の酢飯(約200g)をのせる
- ⑦ ⑥の上に③④の具材(好きなものを適量)を並べる
- ⑧ 手前から奥に向かって巻きすと一緒に巻く

< 榎田さんからのアドバイス >

具材は、生魚は手に入りにくかったのでハムやツナなど手に入りやすい食材を使用しました。具材は水分を抜いておきます。⑥で巻きすに海苔の上にご飯・具材を並べますが、その際に奥側2cmくらいはご飯をのせないようにすると巻きやすいと思います。

● 材料(2本分)

- ご飯 約400g
 すし酢(酢:大さじ3+砂糖:大さじ2程度を混ぜても可) ... 大さじ5
 海苔 2枚
 ※具材(以下は榎田さんが現地でよく使ったもの)
 ハム 厚切り1枚程度
 きゅうり 1/4程度
 パプリカ 1/4程度
 アボガド 1/4程度
 卵 1個
(卵焼きに味をつけたい場合は、砂糖や塩やだしの素などを少々混ぜる)
 油(卵焼き用) 少々
 ツナ缶 1缶
 マヨネーズ 大さじ1程度

< 編集部で再現した感想 >

難易度 ★★★★★☆
 達成感 ★★★★★☆

卵焼きを作る際、一般的な丸いフライパンで作ると海苔の幅くらいに細長く作ることができるので具材として使いやすいと思いました。巻き寿司の具材にパプリカは初めてでしたが、色味がきれいで食感も良く、ツナとの相性も良いように感じました。

● アビチュエラの材料(3~4人分)

- 赤インゲン豆(他の豆でも可) 缶詰1缶
 ニンニク 2カケ
 塩(ニンニク用) 小さじ1くらい
 香りのある野菜(下記は目安。入れる種類・分量は好みで)
 ・セロリ 1/2
 ・パクチー 1束
 ・ピーマン 1個
 オレガノ あれば小さじ1
 かぼちゃ 1/8個
 玉ねぎ 1/2個
 油 大さじ1
 トマトケチャップ 大さじ3~5程度
 水 缶詰の缶同量以上
 コンソメ 小さじ1.5~大1
 塩(味つけ用) 少々

● アロスブランコの材料(3~4人分)

- タイ米 3カップ
 サラダ油 大さじ3
 塩 小さじ2
 水 3.5カップ

< 榎田さんからのアドバイス >

①のニンニクはすりおろしのチューブタイプに塩を混ぜると手軽です。②の香りのある野菜はドミニカ共和国では香りが強いため、切らずに大きのまま入れていましたが、私は野菜も一緒に食べたいので刻んで混ぜ込んで作っています。④や⑤で煮込んでいて水が少なくなってきたら焦げつかないように適量足してください。

うめだ 榎田ミクさん(旧姓:羽白)

ドミニカ共和国/高齢者介護/2017年度1次隊・千葉県出身
 大学時代に作業療法を学び、作業療法士の資格取得。約9年にわたりデイサービス勤務後、知人が作業療法士として協力隊に参加したことをきっかけに自らも応募を決意する。現在は夫の故郷である日本国内の離島に住み、地元高齢者に向けて介護タクシー(病院つき添いや買い物など)や調理といった幅広いケアを行う「くらし支援サービス」を営んでいる。



現地で作った日本食

「巻き寿司」

ドミニカ共和国のデイサービス「高齢者の家」に、高齢者介護の職種で派遣されました。配属先ではレクリエーションのほか、野菜を多く使ったメニューの調理も担当していたので、朝食や昼食、おやつなどで日本食を提供することもありました。地元の方には「日本=寿司」というイメージがあるようで、「巻き寿司」は配属先のほか、結婚式などでも頼まれてよく作りました。海苔は首都のスーパーで購入しましたが、日系の方が住んでいるエリアに行くと同福神漬やゴーヤ、レンコンなども見かけました。

日本で作る現地めし

「アビチュエラ(豆の煮物)」と「アロスブランコ(白ご飯)」

帰国してから食べたくなくなって作ったドミニカ共和国の料理に、豆を煮込んだ「アビチュエラ」と、肉と野菜を煮込んだ「サンコチョ」があります。特に塩と油を入れて炊いたご飯「アロスブランコ」にかけて食べる「アビチュエラ」はポピュラーな日常食で、ホームステイ先でも配属先でも提供されるので毎日のように食べていました。米を炊く際に鍋の底にできる焦げ目のことを現地では「CONCON」というのですが、この部分が香ばしくておいしいので、ぜひ米も炊いてみてください。

< 編集部で再現した感想 >

難易度 ★★★★★☆
 達成感 ★★★★★☆

サラサラスープよりもとろみのある具だくさんスープが好きなので野菜もかぼちゃを入れて作りました。食べ応えのある豆の煮物のスープになりました。タイ米をフライパンで炊くとこんなに香ばしくおいしくなるの!と感激しました。油を入れていることもあって、さほど焦げつかず、いい塩梅(あんばい)のおこげができました。



手に入る具材で華やかに和を伝える「巻き寿司」



ドミニカ共和国の定番家庭料理「アビチュエラとアロスブランコ」



ホームステイ先で振る舞った巻き寿司



配属先の日本食会。ギョーザや炊き込みご飯を同僚と作り、利用者に提供した



結婚式用に頼まれて作った巻き寿司





モンゴル



町外れの小さな工房やモンゴルの羊毛フェルト共同組合と10年以上、ものづくりを続けている

モンゴルの生活に欠かせない 伝統的な羊毛フェルトでつくる日用品

2008年に隊員としてモンゴルに赴任した佐屋 眸さんは、首都ウランバートルで学生たちにPCを使ったデザインを指導した。

「モンゴルは資本主義に転換後、貧富の差が広がり、首都にはマンホールや路上で暮らす子どもたちも多かったです。」

学生の中には遊牧民出身の子も多かった。ひとたび首都を出ればひたすら草原と遊牧民の世界が広がり、佐屋さんはそこで羊毛でつくられたフェルトに出会う。「モンゴルが起源ともいわれる羊毛フェルトは、遊牧民の住居・ゲルの主素材として天幕に使われます。寒暖差の激しい気候の中、優れた温度調整の働きをしていました。」

フェルト製品づくりを生業としている人のほとんどが女性で、当時は離婚率が高かったためシングルマザーも多数いた。羊毛の繊維が絡み合うようかっぱいこねる手仕事が、たくましいモンゴルの女性たちと重なって見えた。「草原での暮らしがあるからこそ生まれた羊毛フェルトにストーリーが詰まっていると感じました。デザイン

の技術を生かし、モンゴルの良さを伝えるフェルト製品を日本に届けたいと思いました」。

任期終了直前に複数の工房を回って職人と信頼関係を築き、新たな製品の制作を依頼。帰国後の10年からdaladala.として活動を始めた。以来、毎年モンゴルに出向き、職人たちとのものづくりが続く。コロナ禍で土産物などの他の仕事が激減した中でも、daladala.からの発注は継続できたため、女性職人の一人がお礼の手紙とぬいぐるみを送ってくれ、佐屋さん自身もそれに励まされた。

ダラダラとは「乗り合いバス」という意味で、いろいろな国の物語や風景を伝える存在でありたいと願ってつけたものだ。「仕事をする上で気をつけているのは、つくってくれる人と必ず顔を合わせて仲良くなることです。製品の品質は作り手との信頼関係に大きく左右されますし、作り手も『ヒトミのためだから』という思いで良いものをつくってくれるのです」。



＼ うちのこだわり /

OB・OG ショップ



スリッパ(上)とコースター(右)。モンゴルの生活に欠かせない羊毛フェルトと、佐屋さんによるデザインを組み合わせ上げて。現在、ネット販売を中心に活動中



SHOP DATA

daladala. (ダラダラ)

経営者：佐屋 眸さん(旧姓：小島)
(モンゴル/デザイン/
2007年度3次隊・兵庫県出身)
ウェブショップ
<http://daladala.jp/>



Text = 村重真紀 写真提供 = daladala.



見やすく読みまがえにくい
ユニバーサルデザインフォント
を採用しています。

